

Title	一九九一年度三田史学会大会 シンポジウム「ことばの歴史生態学」
Sub Title	Language and society in history
Author	三木, 亘(Miki, Wataru) 岩見, 隆(Iwami, Takashi) 湯川, 武(Yukawa, Takeshi) 羽田, 功(Hada, Isao)
Publisher	三田史学会
Publication year	1993
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.62, No.3 (1993. 1) ,p.75(287)- 124(336)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム記録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19930100-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一九九一年度三田史学会大会

シンポジウム「ことばの歴史生態学」

一九九一年六月二十九日（三田校舎にて）

司会

三木 旦

報告者

岩見 隆

湯川 武

羽田 功

三木 司会の三木 旦です。御案内に書きましたように、

「ことばの歴史生態学」と名付けてシンポジウムをやりたいと思います。シンポジウムというのは、もとのギリシア語のシンポシオン―饗宴などと訳されます―の原義のとおり、飲物などあって好き勝手に語りあえればいちばんいいのですが、飲物はちよつと無理なようで（笑）。いずれにしても、学問は本来遊びだと思ふのですが、シンポジウムは遊び中の遊びで… ただし、知的に遊ぶ（笑）。いろいろ研究した挙げ句の研究成果を発表する様なのは午前中で終わりました、これは、こうも考えられるんじゃないだろうか、ああも考えられるんじゃないだろうか

かという、問題を出し合つて大いに議論していただく場です。はじめ着となつていただいた三人の方のお話の後、自由に質問・御意見などを、ぜひいろいろ出していただきたいと思ひます。

御案内にも書きましたように、人間の歴史はことばを媒介に行われています。ただ、従来の歴史学は文字化された言葉だけに依存してやってきた面が多いのですが、今、民衆レベルからの歴史をトータルにとらえようとする、文字化されない、人々が日常それで暮らしている言葉の範囲をも、なんらかの意味でとらえてゆかないと、歴史をトータルにとらえることはできない。そういう観点から、文字化されていない部分まで問題にするわけで、当然、その資料・材料が非常に限られて、いろいろ状況証拠からものを言う、言わざるを得ない領域だ

と思うのですが、あえて大胆にそういう所へ踏み込んで、学問的に言えば、人類学・民俗学などと歴史学をくつつけてしまう：そういう試みとして、本日のシンポジウムをやってゆきたいと思います。

最初に、岩見隆さんに「イラン人とアラビア語」という大変面白い組み合わせの問題を御話しいただきます。

では、岩見さん、どうぞ。(拍手)

岩見 「イラン人とアラビア語」というテーマですけれども：何故自分がこんな事に気がついたかという事から、ちよつと簡単に御話したいと思います。私が留学しておりました頃、ある時、文学部長の話を聴く機会がありました。そのテヘラン大学の文学部長が言うには「当テヘラン大学、少なくとも当文学部においては、アラビア語は、外国語とは考えてない」ということを言われたんですね。つまり、アラビア語というのはイラン人にとっては外国語ではないんだ、そのくらいイラン人はアラビア語に慣れ親しんでいるんだ、殊に、ペルシア文学だとか、そういうことをやる人間にとつては、それは必須の教養なんだと、そういう意味でおっしゃったわけです。しかし、その頃、自分の身の回りの学生を見ておりますと、あまりアラビア語というものに対して関心を持っていない。

それからもう一つ、能力を見ても、たいして出来るとも思わなかった。どうもこれはおかしいんじゃないか、そう思った事が、「イラン人とアラビア語」という事を考える基になったわけです。で、そのつもりで――つまり、イラン人というのは、そもそも基本的にアラビア語が、ごく一部の人を除いて得意ではないのではないかと。よく言われるような、イラン人のアラビア語に対する能力といえますか：私は留学する前にですね、「出来る」という話を聞いて行ったものですから、ちよつとがっかりした所もあつたし、当て外れであつたわけです。

で、調べてみたわけですが――結局、イラン人がアラビア語と対するようになったのはいつからかと申しますと――これはまあ、いろいろあるでしょうが、全般的な形でそういう事態になったのは――七世紀の中頃に、ムスリムのアラブによつて征服されて以後ですね。六四二年のナハーヴァンドの戦い。このナハーヴァントの戦いで、ササン朝のペルシアがほぼ壊滅状態になり、更に六五一年に、最後の王様のヤズデゲルド二世がメルヴで殺されちゃうわけです。で、ササン朝は滅ぶ。この七世紀の半ばから九世紀の半ば迄を、イラン人のある歴史家が「沈黙の二世紀」と呼んでいる。何故「沈黙の二世紀」かと

いうと、この間、イラン人が残したペルシア語の文献というものが残ってない。そこで、これを「沈黙の二世紀」と呼ぶと言うんですね。勿論、ペルシア語の文献が残ってないという事は、その間に全くペルシア語が無くなったのか、イラン人が沈黙しちゃったのかというところではない。あの通りおしゃべりですから、沈黙するはずはありません。ただ、それはまとまった形で残ってないんですね。断片的に、例えば、アラビア語の史料などの中に残ってる。あるいは、ユダヤ人のユダヤ系イラン人と申しますか、ユダヤ教徒のイラン人がヘブライ文字で残したペルシア語の文書が、ちよつと残ってるという程度のものですね。

この時代、何故「沈黙の二世紀」が生じたのかという事について考えてみたのですが、つまりこの時代、少なくとも記録に残るようなものとして、イラン人の使っていた言葉はアラビア語であった。何故アラビア語を使わなくちゃいけなかったのか。その理由として、私が考えましたのは、ペルシア語散文の成熟していなさ、未成熟、未熟という事です。で、ここのところ（レジュメ）に、パフラヴィー語の事をちよつと書いておいたわけですが、パフラヴィー語というのは、ササン朝時代のペルシア

語の事だと思っただければいいと思います。あるいは、中期ペルシア語とも言います。パフラヴィー語というのは、古さもさることながら、書写体系が非常に不完全なんです。つまり、文字に書き記すシステムが、自由にありとあらゆるものを描写でき、書き記す事が出来るという、そういう言葉じゃないんです。その書写体系がどういう意味で不完全かという事を簡単に（レジュメに）書いておいたんですが、まず文字の不完全さ、ホズヴァーレシユ、それから歴史的な正書法と、こういう問題がある。こういった書写体系の不完全さを持っているもの、それが今のペルシア語の前段階としてあったという事が、ペルシア語の散文の、なかなか伸びてゆく事ができなかつた一つの原因なのではないかというのが私の考え方なんです。

で、個々の項目について簡単に御説明しておきますと、先ず「文字の不完全さ」というのは、これはパフラヴィー文字というのは十四文字しかないんですね、アルファベットで。そうすると、文字によっては、例えば一つの文字を三通りにも四通りにも読み分けなくては行かない。それから、パフラヴィー文字は、アラム文字から出てきたものなんです、文字同士を組み合わせますね。

組み合わせると別の形になるんですが、その形、別のそうやって出来上がった、組み合わせで出来上がった結果の別の形を、これまた何通りにも読む事が出来る。それから、「ホズヴァーレシユ」と申しますのは、日本語で申しますと「漢字訓読み」と考えていただければ良いです。つまり、パフラヴィー語の中に、アラム語起源の単語が入ってくる。アラム語で書いてある。でも、読むときはペルシア語で読む。文字としては「TURA」と書いてあるんですけど、読むときはペルシア語で「gav」^{ガヴ}と読む。完全に漢字の訓読みですね。こういうものがある。「歴史的正書法」と申しますのは、これまた日本語の例で申しますと、昔の「旧仮名遣い」と思っていただければ良いです。つまり「てふてふ」と書いて「ちようちよう」と読む様な。こういう現象は、我々の様に多少「漢字の訓読み」ですとか「歴史的仮名遣い」「旧仮名遣い」といったものに慣れている人間にとっては考え易いんですけども、全くアルファベットの世界に育っている人にとっては非常に難しい問題の様です。とにかく、こういう「書写体系の不完全さ」というのが、パフラヴィー語には付きまといっている。で、それが、ペルシア語散文の形成の遅れを導き出したのではないかという風

に、考えたわけです。

この反面、イラン人は、この時代にアラビア語を駆使致しまして、いろいろな活動を行っています。今の問題に直接関わる事で申しますと、イラン人が、アラビア語の文法の整備ということに非常に力を注いだ。外国人ですよねーつまり、アラビア語というのは、イラン人にとって全くよその言葉ですから、やっぱりそれに眼が行くっていう事なんでしょうが、アラビア語の文法の整備に非常な努力を払いました。殊に有名なのが、ここ(レジュメ)に書きましたスィーバワイヒという人ですね。七九三年頃没した。このスィーバワイヒという名前、この名前も非常にはつきりペルシア的な特徴を表している名前です。

いずれにせよ、「沈黙の二世紀」という段階があったわけですね。この間、イラン人も、ものを書く時はアラビア語で書いた。ところが、「沈黙の二世紀」がやがて終わる時代がやってくるわけです。今のイラン人が「沈黙の二世紀」の終わりの象徴と考えているのが、ここ(レジュメ)の次に書いてありますサツファール朝のヤアクーブ・ライスという人間です。サツファール朝という王朝は、八六七年頃始まって九〇三年まで続いた。

これは、スイースターンですから、今のイランとパキスタンの国境の方ですね。砂漠だけで何にも無い所ですが、そこにできたのが、このサツファール朝という王朝です。このヤアクーブライイスという人が、この王朝を立てたわけですが、このヤアクーブライイスはどういう男だったかという、親父さんが、ザランジの町のバーザールの中で「サツファール」をしていた。「サツファール」というのは、金物磨き。銅の器やなんかは、放つときますと色が変わるでしょう。錆びますよね。あれをもういっぺん綺麗に磨き直す仕事。これは今でもあります、バーザールに行けば。そういう仕事をしてたというんですね。それで、そのヤアクーブが：彼は若い頃から、男気に富むというか、その、男伊達だったわけです。仁侠だったわけですね。で、親分肌の人で、周りに、段々、子分が集まってくる。そうすると、そういう子分がある程度の勢力になった時、彼は一旗掲げるわけですね。そして、その土地を支配していたアラブの役人をやつつけて。更に、討伐しにきた政府の軍隊をやっつけて、とう様な事をして、段々、大きな勢力になっていって、とうとう、王朝といわれるものをつくる様になったというんですが、お話しはこのヤアクーブライイスに関わってくる

わけです。つまり、ヤアクーブライイスが「功なり名遂げて」王様になった段階で、ある時、宴会をやっていたんでしょうね。そうすると、詩人が立って、ヤアクーブライイスを誉め讃える詩を歌う。昔の詩人というものは、そうやって王様や偉い人から御褒美を戴いては生活していたわけですから。ところが、その詩がアラビア語だったというんですね。それを聞いていたヤアクーブライイスが、突然立ち上がって「お前は俺の全然判らない言葉で、なんで、詩をつくって俺を誉めているなどと言うんだ」と言って止めさせたと言うんです。つまり、ヤアクーブライイスの様な、バーザールの中で育った、おそらく何の教養といったものも持ち合わせていない人間にとつて、アラビア語というものは、少なくともこの時点でも、無縁のものであったという事を、この話は物語っていると思いますし、また、今のイラン人の解釈では、これが所謂「ペルシア語のルネサンス」の開始になるんだという風に言うわけです。ここでヤアクーブライイスがアラビア語を使う事を拒否したわけですが、ではその代わりに何を使ったら良いんだという事で、結局ペルシア語を使う、使わざるを得ない。ここで「沈黙の二世紀」が終わって、イラン人がペルシア語を使つてものを

記録する様になったのだというのが、今のイラン人の普通の解釈です。

こうして、ペルシア語が見直され始めまして、面白い事には、「韻文」はすぐ全盛期を迎える。ところが、「散文」は、まだ立ち遅れるわけです。ようやく散文の作品が出てくるのは、十世紀になってからです。少しづつ散文の作品が出てくる様になります。つまり、散文的なものというのは、この時代迄はまだアラビア語で表現される方が多くて、そして、ペルシア語の散文作品は十世紀にはまだ少なかった。しかも、そのペルシア語の散文作品も、十世紀に現れ始めましたものは—どうもこれはあまりイラン人は言いたがらないんですけれども—アラビア語の散文を下敷きにしていて、私は思います。と言うのは、ごくごく初期の、その様な散文の作品というものは、今残っておりますものが、例えばタバリーという人がアラビア語で書いた『コーラン』の注釈のペルシア語抄訳です。やはり、どうも散文は、アラビア語を下敷きにして出来上がってきたのではないかと思えます。勿論、こういう事は、イラン人は言いませんよ。それから、実用書、例えば薬学の本ですか、そういうものが現れ

るわけですが、こういうものも、やっぱりアラビア語のもちがあつて、それをもとにしてイラン人が作り上げたものだろうと思えます。

十一世紀になりますと、その様なアラビア語の散文の影響下に、段々ペルシア語の散文が進んでくる。そういう傾向を作り上げましたのが、例えば、学問の世界で言えば、イブン・スィーナーとかガザリーという様な、イラン人でありながらアラビア語も良く出来るし、ペルシア語でもものを書く能力のあつた人々が現れて、そして、ペルシア語散文の形成に大いに貢献したという所があるんだろうと思えます。で、この頃からそろそろ、アラビア語はイラン人にとって、普遍的な、書写用語と申しますか、書き記す為の道具では、無くなりはじめのわけです。というのは、ペルシア語というものが出て参りましたから。

十二世紀以降になりますと、ペルシア語散文の各面での発展、いろいろな作品が出て参ります。別に、学問だけに限らず、文学などでも、散文作品が出てくるようになる。一方、アラビア語はアラビア語で、宗教諸学のための用語、専門用語としての地位を固めてゆく事になります。つまり、イラン人にとって、アラビア語が、学校

でーここ（レジュメ）にマドレセ教育と書いてありますが、マドレセで与えられる教育によって、教えられ覚えさせられて使う言葉という風になって参りまして、しかも、その使い途と申しますのも、宗教的な諸学問、例えば『コーラン』関係の学問ですとか、イスラム法学、あるいは哲学とか神秘主義といった諸学問に限られてくる。そういう、今現在ーと申しますか、ごくごく近い時代、過去のごくごく近い時代ーまで、イランにおいて存在した、アラビア語とペルシア語の並存状態というものが、十二世紀ぐらいから始まって来るのだらうと思います。

で、この様にして、イラン人にとってー全部のイラン人にとってではありません。教養のあるイラン人にとってーある意味で「第二の言語」となりましたアラビア語と申しますものは、これはマドレセ、学校教育という一つの枠の中で教育されるものでありまして、当然、そのもとに一種の規範文法的なものが存在する。つまり、イラン人自身が、自由にアラビア語をしゃべったり、そういった中から生まれてきたものではなくて、学校で教えられる「外国語」としてーまあ、外国語という意識は無いんでしようがー学校で教えられる「別の言葉」として存在しているものですので、ある規範から大きく逸脱する

ということはなくなりました。これは、自由にその言葉を使つてしゃべったりしておりますと、おそらく自然の変化というものでいろいろ変わってくる要素があるのだと思うのですが、同じ教科書を何百年も使つて、それで教えられているという言葉ですので、変化の仕様が、ありえない。従つて、今のイラン人の書くアラビア語ーあるいはひと昔まえのイラン人が書いたアラビア語でもーアラビア語として特別に文法的な意味での欠陥があるとか、どこがおかしいところがあるというのではない。ある程度きちんとまとまったものが、今まで伝わっている。それが、おそらくイラン人の用いるアラビア語の、一つの特徴だらうと思うのです。

ただー私が本当はもう一つ関心を持っておりまして、（レジュメの）一番最後に書いたのですが、モッラー・サドラーのアラビア語の様に、イラン人独特のアラビア語が形成されてきたという面もある。このイラン人独特のアラビア語という感じを本当はもっと表現しないといけないと思うのですが、なかなかこれは表現するのが難しいですね。つまり、どういうことを申し上げたかたかと申しますとーアラビア語であることは間違いないのです。文法的にも間違っていない。使つてある単語も、

別に変な単語が特別に混じっているのでもない。しかし、どう読んでみても、やっぱりアラビア語ではない、そういうアラビア語なんです。これは何とも言いようが無いんですけれども、その様に取りあえず申し上げておきます。どういう風になっているかと申しますと、結局、ものすごく長いんですね。非常に文章が長いんです。一つの文章が終わるのに、長く時間がかかる。どうもこれは、アラブの書くアラビア語とはやっぱり違うなという気がするのですが：本当はこういう事は、例えば「長い」というのは一体何なのかとか、いろいろ考えないといけないのでしょうか、あるいは材料を提供しないとイケないのでしょうか、どうもなかなか上手く材料が集まりません。何しろ、特別な欠陥とか、そういうのではないのですから、なんとも把握の仕様がないです。そういう面があります。

それで、一番最初の御話しに戻るわけですが、今現在のイラン人のアラビア語に対する意識の変化について考えてみます。アラビア語というものが、ある特別な、例えば、マドレセならマドレセという、教育のシステムとしてしっかり結びついて育ってきたという事実。それは、逆に言えば、マドレセという教育のシステムが、イ

ランにおいて普遍性を失ってしまうと同時に、アラビア語というものも一減ってしまうというわけではありませんけれども一彼等のアラビア語の力、アラビア語を理解する力も、当然、弱くなってくるという事になるわけです。マドレセが力を失ってきたというのは、これは、要するに、西欧的な学問をイランに植え付けるために、いわば西欧的な大学制度がイランに持ち込まれて、それに類したものが創られるようになってきて、多くの人々が、そちらの教育を受けるようになってきた。そういう状況で、マドレセは力を失っていった。それと同時に、イラン人の間での、アラビア語の理解力、あるいは使用能力も、段々衰えてくる様になる。これは、理の当然であると思うのです。一番最初に申し上げた文学部長は、思想の専門家でしたから、そういったマドレセ教育という様なものに、ある種の憧れをまだ抱いておられた。ところが、彼の学生さんは、現実に結局もうそういう伝統とは無縁の世界に育つ人が多かったという事なんだろうと思います。

では、簡単ですが、これで終わらせていただきます。三木 どうもありがとうございました。いまの岩見さんのお話しの中に、歴史の実態と言語表現に関する様々の

問題が含まれているわけですが、三人の方、続けてお話しいただいて、その後、少し中休みをしましてから、コメントやら質疑、討論に入りたいと思います。それでは、次に、湯川さん、お願いします。

湯川 湯川でございます。お渡ししたレジユメに沿って、簡単に御話し申し上げて、もし御質問があれば、後でいろいろ付け足していくという事にさせていただきます。

私が御話しするのは『アラビア語とコプト語』という題になっておりますが、むしろ、題としては『エジプトのアラビア語化』という題を付けた方が良いかと思えます。それに『滅びた言語・コプト語』という副題を付けたいと思います。

そもそもコプト語はどういう言語かと申しますと、エジプトの地元の言語です。古代エジプト語の流れを汲んでいて、古い言語学の分類では、「セム・ハム語族」の内の「ハム語」系の言葉だと言われております。この言語が、何故「コプト語」と呼ばれるかと言いますと、エジプトがキリスト教化されてエジプトのキリスト教化は非常に早く、もう三世紀には、かなり根付いております。その教会の事を「コプト教会」これは、「エジプト」という言葉と同じ語源だと言われます。すなわち

「エジプト教会」と呼びました。エジプトのキリスト教化は、いろいろな改宗のレベルはあるのですが、ともかく、エジプト人と呼ばれる人達は、殆ど皆、キリスト教徒になってしまっていて、コプト教会の教徒ということで「コプト人」、あるいは「人」を付けないで「コプト」と呼ばれるようになりました。そして、彼らが話しているエジプト語は、「コプト語」と呼ばれるようになったわけです。

このコプト語は、イスラムが入ってくる七世紀の前半迄は、エジプト人が皆使っていた言語だったわけですが、七世紀の半ば頃に、ムスリムであるアラブがアラビア半島から進出して参ります。エジプトの元々の住民であるエジプト人—ここです。所の「コプト」—と、征服者である「アラブ」は、言語も宗教も文化的な伝統も異なった、全く別の民族だったわけです。当時、エジプトは、ビザンツ（東ローマ帝国）の支配下にありまして、支配言語であるギリシャ語が上から押しつけられております。しかし、地元の民衆のコミュニケーションは、コプト語が使われておりました。宗教的にも、ビザンツのギリシャ正教会はかなりエジプトに圧力を加えまして、沢山の信徒を獲得したわけですが、それでもなお、

地元の教会であるコプト教会が殆どの民衆を吸収している状態でした。こういうビザンツの支配は、コプトの強い反感を買っておりまして、イスラム教徒であるアラブが入ってきましたと—これは幾分か誇大な表現も入っている部分もあるのですけれども—コプトはアラブの進入をかって歓迎して、自分達をビザンツの圧制、あるいはギリシャ正教会の圧制から解き放ってくれる人々であると思見なしたという風に言われています。

アラブの支配は、イスラム化、すなわちイスラムへの改宗を、エジプトで強制的に行うという事はありませんでした。これは、エジプトだけではなく、他の地域でもそうでした。アラブ人が支配者である事を認め、同時に、イスラムという宗教の優越性を認め、その上、税を支払うならば、地元の住民達—当時、住民を社会集団として考える時は、だいたい宗教的な共同体として捉らえておりましたから、つまり、コプト教徒です—は、自分達の自治を守る事が出来るし、勿論、生命・財産・信仰の自由も保証されました。日常生活に関わる大きな問題は税の問題ですが、新しい支配者であるアラブがかけた税は、ビザンツ時代よりもかなりの程度に税率が低く、人々には喜ばれたと、一般に言われております。

この様にして、アラブの支配は、エジプト人、つまりコプトから見れば、異民族・異教徒の支配ではあったが、比較的摩擦が少ないものとして出発しました。ところで、アラブ・ムスリムが、その支配を通じてエジプトに与えた影響は何であったのかと言いますと、結果として見ると、アラビア語とイスラムです。しかし、最初期には、すぐにアラビア語は採用されませんし、勿論、イスラムに改宗しなくても良いと言っているわけですから、この二つは大きな問題にはならなかったのですが、現代迄の歴史を考えてみますと、アラビア語とイスラムというのが、結局は、アラブ・ムスリムがエジプトを征服した事の最大の歴史的な影響だったと言えると思います。

さて、「アラビア語化」と「イスラム化」は、異なった次元の問題であります。エジプトの歴史を見てみますと、この二つは、相互に影響を与えあっている事は確かですが、必ずしも、その二つが平行して、イスラム化したからアラビア語を話すようになった、あるいは、アラビア語を話すようになったからイスラム化したというふうな直接の関係は見られません。歴史を見てみますと、実は、「言語の採用」(アラビア語化)の方が早く始まったという風に考えられます。そして、「イスラム化」は、

ややそれと時代がずれて起こってきて、そして、おそらくこれは、なかなか証拠がはっきりはないのですけれども――その両方があるレベル（例えば、改宗率が六―七十パーセントから八十パーセント、つまり、マジョリテイでも、安定したマジョリテイになるとか）まで達した時を考えてみますと、十一、二世記ぐらい迄には、両方がずれて出発したのが、大体同じ（どちらかと言うと「アラビア語化」の方が完成度は高いです。「イスラム化」の方は、現代に至る迄、完全にイスラム化されたわけではありませんから、完成度は低いんです）レベル迄に達したのではないかと、いう風に考えられます。

では、なぜ「アラビア語化」が先に進んだのかを考えてみます。先ず、その実態を考えてみますと、コプトの人達は「コプト語」という言語を話し書いていたわけです。それとは別に、既に、アラブ・ムスリムの征服がある前に、エジプトには、幾分かのアラビア語の影響があったんだらうという推測がなされています。それは、言語に直接影響するのではなくて、アラビア語を聴いた事がある、使った事がある、アラビア語をしゃべる様な人達と接した事があるという形で、アラブ征服以前にも、関係が出来ていたのだらうと考えられています。勿論、

エジプト全域ではなく、ある地域ですけれども、アラブ系の、つまりアラビア語をしゃべる様な、遊牧民だとか商人は、当然、エジプトの近くにまで居るわけですから、そういう人達が何らかの形でエジプトに入ってきていたために、エジプト人にとっては、アラビア語は、全く新しい言葉というわけではなかったのではないのでしょうか。しかし、それは、社会の中のあるレベルで止まっていたことも確かだと思います。

そこに、七世紀の中頃に、大挙して軍隊としてやってきて、征服してしまったわけです。その征服者達――アラブ人・アラビア語をしゃべる人達――というのが、支配者になったわけです。アラビア語は、先ず第一に、エジプトにおいて「支配者の言語」として成立します。支配者の言語は、当然、支配を行うためには、その言語が通じなくては困る、つまり、行政のレベルに下りてくるわけです。行政のレベルに下りてくる時に、皆が必ずしもアラビア語を知っているわけではないので、ある種の通訳なり、両方の言葉がわかる人達が必要なわけです。それで、アラブ・ムスリムの政府の行政の言語は、最初は、彼らの命令はアラビア語で発せられますけれども、人々に伝わる時には、初期には、ギリシャ語が使われます。

これは、非常に面白い現象で、ビザンツ時代の伝統が残っておりましてギリシャ語が使われるわけです。勿論、コプト語も一部使われていた様ですけど、それ以前の伝統を、そのままアラブ政府が引き継いで、ギリシャ語が使われる。

しかし、征服からある一定の時間が経ちますと、行政命令がすべてアラビア語化されていきます。これは、大體、征服後、六十七年経ってからですが、八世紀の初頭ぐらいから、直接の行政命令がアラビア語で書かれるようになります。そして、実際にその行政用語を使って徴税する、あるいは課税する役割を担っていたのは、アラブ人自身ではなくて、ビザンツ時代からいたコプトの役人達だったのですけれど、その役人達がアラビア語で行政を行うようになります。この行政の言語としてのアラビア語が、コプトの一般民衆のアラビア語採用に非常に大きな影響を与えたのではないかというのが、先ず第一の点であります。現在、そういう行政の文書だとか何かの史料が少し残っております、それがギリシャ語とアラビア語が並記されていたり、ギリシャ語だけで書かれていたりしたものが、殆ど全部アラビア語だけになつていく過程がある程度判りますけれども、民衆がそれを

読んだ時、本当に判ったのかどうかという事は確認出来ません。しかし、少なくともコプトの行政官達のレベルでは、アラビア語が広く行われる様になつたであろうという事は、十分に推測出来ます。

そして、その次の段階が、日常的にコプトの人達がアラビア語をしゃべる段階、使う段階ですが、これも実は史料が全く欠落しておりまして、いつ頃からそういう風になつたのか決定出来ません。しかし、ごく断片的に残っているものから推測すると、少なくとも八世紀の半ば頃からは、日常言語化し始めていたであろう、そして、コプトもアラビア語でお互いのコミュニケーションをするようになったのではないか、特に、都市に住んでいるコプト達は、アラビア語化が早かつただろう、と考えられます。そして、そういう事を示す断片的な証拠として時々取り上げられるのは、コプト自身が書いたアラビア語の、同じコプトの仲間に出した手紙の類です。これは、残っているものはそんなに沢山は無いのですが、九世紀、十世紀のものがあります。八世紀のものは殆ど無いと言われていますが、九世紀のものを見ますと、独特の文体で、古典文法にあつたアラビア語で書かれているわけはありません。むしろ、現在まで続いているエジプトの

口語表現的なものが随所に見られる様な手紙を書いているわけです。これは、逆に言うと、話し言葉でアラビア語がこなせているから、そういう文体になったのであると推測されます。こういう幾つかの断片的な証拠で、少なくとも、都市に住んでいて文字を使う様な人達の間では、アラビア語の読み書き話しまで―先ず「話す」のが最初で、その後に「読み書き」だと思ふのですけれども―八世紀から九世紀には、かなりの程度に浸透していただろうと言えます。

その後、歴史的な事情ははっきりしないのですけれども、アラビア語化が急速に進んだという事の証拠は、ただ一つ残っております。十一世紀になり、コプト教―もう十一世紀は、かなりの程度にイスラム化が進んでいたんですけれど、それでもコプト教徒は沢山いたわけです―の司祭の、ミサに使う信徒の指導書が、既にアラビア語で書かれているということなんです。ということはつまり、司祭が何か指導しようと思うと、アラビア語でない一般的な人達は判らなくなっていたわけなんです。一部の地域を除いた殆どの地域の教会で、コプトの司祭は信徒達にアラビア語で話しかけていて、ここはこういう事なんだよと説明する様になったという事が判ります。幾分か史料

の上では間が開いてしまっていて完全には埋められないのですけど、十一世紀頃までには、殆ど完全にアラビア語化が進んでいたのだろうと考えられます。

さらに、十三世紀になりますと、コプト語が出来る人が今度は逆にもう殆どいないという状況になっています。その時代に、非常に初歩的なコプト語文法というのが突然書かれまして、これを使って勉強しなければいけないんだと言う人が現れてきました。という事は、もう殆ど人はコプト語の文法を知らないというわけです。多くの人がやさしい文法も知らないし語彙も知らないのです。強い危機感を抱いたある知識人がコプト語をちゃんと残さないと駄目だという様な事をはっきり言いまして、そしてコプト語の文法書を書いたのです。同じ著者が多くの本を書いています。殆どものはアラビア語で書いているんです。これは、コプト史研究家に言わせると「何百年ぶりに書かれたコプト語の文法であり、その後、何百年か書かれなくなってしまうコプト語文法の最後のものである」という様な事を言っておりますので、アラビア語の浸透と、それに逆比例するコプト語の衰退というのは、もう十三世紀・十四世紀には、非常にはっきりした事態になっていたと思います。

ところで、前に、アラビア語化とイスラム化とは必ずしも平行していないと申し上げましたけれども、エジプトのイスラム化は実はアラビア語化よりも少し遅れました、大きな波が九世紀から十世紀にかけてやって参りまゝす。九世紀ぐらゐまでは、人口比で言つてどれくらいか、ごく大ざっぱですが、イスラム教徒はせいぜい二割とか、三割くらいと言われていました。それが、あつという間に、六割から七割くらいまで、九、十、十一(世紀)ぐらゐにかけて増えます。最終的にイスラム化が進んだのが、十三・十四世紀の時代だと言われています。十三・十四世紀に―これは、十字軍に関係あるのですけれども―キリスト教徒に対する反感が強まりました、しかも、支配者達がそういう民衆のキリスト教に対する反感を利用して、コプト教会襲撃だとか、そういう事件が幾つも起こります。そして、それによつて、大体、人口の七割、あるいはそれ以上の人がイスラムに改宗します。

結局、今までお話しした事を簡単にまとめますと、アラビア語化は、ほぼ完全に、十一世紀までに完成してしまふ。イスラム化は、かなり進行するんですけれど、結局七割から八割の改宗に十三世紀ぐらゐまでかかる、と、というのが大ざっぱな流れです。

ここで再びアラビア語化の問題を考えて見たいと思うのです。どうしてエジプトでは、アラビア語化がこんなにスムーズにいったのか。よく考えてみますと、とても不思議な事です。「お前達は、自分たちの宗教を守つてもいいぞ」と言われている。コプトの共同体内部では、自分達のやり方で自分達でやって良いという事を完全に認められているわけです。ですから、教会内の出来事をずっと全部コプト語でやってもいいし、教会と信徒の間もコプト語でやつていい筈なのに、何故アラビア語化していったか。これは、ただ一つの理由に帰する事は出来なかつたか。これは、幾つか理由を考えてみます。

まず第一は、支配者の言語である事。このことの持つ強制力、あるいは強制力とまで行かないまでも、影響力は非常に大きいと思ひます。支配者は、七世紀の半ば以来ずっとムスリムです。初めは純粋なアラブですし、その後アラブでない人も来ますけど、支配権を持っているムスリム達はアラビア語です。これが非常に大きな力を社会に与えるのは、当然だと思ひます。権力というのは、経済的側面一つをとつても、大きな富を集める力がある、そしてその富が消費を生み出すわけですね。その消費力が、商業をしている人を引きつけ、職人を引きつけとい

う形で、人々が権力の周りに集まってくるわけです。そういう意味で、支配者の言語というのは、大きな力になっただろうと言えます。さらに、このアラビア語が行政に使われるわけですから、行政を通じて末端にまで下りていくことになります。

もう一つは、コプトに独特の社会的な選択の問題があると思います。つまり、ムスリムである事は社会的に様々なメリットがあるわけですし、自分からイスラムに改宗した人が沢山います。特に、権力の中枢に近い人達は、様々な経済的・政治的な動機で改宗するわけです。当時の考え方で言えば、イスラム教徒になるという事はアラビア語を採用するようになる事です。あるいは、イスラム教徒になるという事は、征服者としてやって来たアラブの、何らかの保護下・庇護下に入るという事—マワリー—と言いますけれど—そのマワリーになる事です。出発点はそういう事なんですけれども、その後、それが少しづつ広がっていったら、アラビア語を自ら選択して話す様な人達が増えてきたのだと思います。コプトの場合、更に重要なのは、数の上ではかなり長い間マジョリテイだったんですけれども、社会的・政治的な力の上では初めからマイノリテイなわけです。マイノリテイ集

団は、自分達の存在意義というものを守ろうとします。その時、コプトは何を選択したかというところももちろん、コプトの全てではなくて、ごく一部の人々ですが—自分達の存在を社会的に支配者に認めさせ、自分達の存在を保証させる根拠として、官僚になる事を選びます。「書記」と一般に言っておりますけれども、書記階級になるうとしたのです。これは、アラブの側も必要だったわけですね。自分達には行政能力はないから、地元の行政能力のある人達を使わなくてはならない。コプトの側も、やむを得ずなったという側面と、意識的な選択によって、なったという側面がある。行政官として、書記として、政府に仕えるわけですから、アラビア語を採用しなくてはならない。この人達は、積極的にアラビア語を使った人達です。自らの社会的な選択によって、積極的にアラビア語を使う。これが、コプトに見られる集団的選択であり、ものの考え方だったと思います。

それと同時に、エジプトは、イスラムの征服以来「都市化」が非常に進化した地域だと言われています。初めのうちは、そんなに大きな都市は無かったのですが、アラブ支配の根拠地から始まり、どんどん都市化が進んでいきます。都市化が進んだことが、アラビア語化にどう

いう関係があるか。勿論「都市」が支配の拠点・行政の拠点になっていきますから、そういう所では当然、アラビア語が使えた方が有利なわけです。都市にもともと住んでいるコプトは、宗教は変えなくても、早くから、都市化によって、アラビア語を習得するわけです。習得の必要性を感じるわけです。それと同時に、都市化が進んで来ますと、農村に住んでいたコプト教徒達も、都市へ移住して来ます。都市移住は、九世紀の半ば以降、急速に起こってきたと言われておりますが、もともと農村にいたコプト教徒が都市に移住する事によって、アラビア語化が一層進展したのであると推測出来ます。

いったん、都市住民がかなりの程度にアラビア語化されますと、エジプトの地形が独特の作用をします。皆様ご存知の通り、エジプトでは、ナイル川に沿った所に人間が住んでいます。ナイル川は、アスワンと地中海の間で千数百キロありますけれど、標高差があまりなく、非常に平らな帯状の平野があつて、最後はデルタになっていきます。つまり、川に沿って行けば、何の障害物も無いわけです。地理的な特徴としては、「僻地」というのが生まれにくいわけです。人里離れた孤立した部落とかが余りなく、人の住んでいる所はどこでも平らで、行くの

はそれほど難しくないので。これは一つ大きな特徴になると思います。人間が入りやすいと同時に、言語とか文化の様な抽象的なものでさえ、浸透しやすい地形だったのではないかと言えます。

もう一つの点は、エジプトは、ナイル川の水利によって支配される社会ということです。これは、交通の上でもそうですし、基幹産業である農業もそうなのです。一元的に、水を通して支配出来る社会です。支配者が水をおさえてしまふ、ナイル川をおさえてしまふという事は、交通も一元的に支配しやすくなり、農業も支配しやすくなる。こういう均一的な社会というのは、やはり、都市部でアラビア語化が起これば、農村部にも非常にそれが移りやすい社会ではないかという風に私は考えます。

最後に、幾分か言語文化的な問題ですけれども、コプト語の状況というのは征服期にはあまり高いレベルになつたと、一般には言われています。ビザンツの支配からギリシャ語がどんどん入ってきます。すると、コプト教会の書き物も、ギリシャ語で書かれた物がたくさん出てきます、神学書にしても、何にしてもです。もう一方、コプト語というのは、古代エジプト語以来の非常に古い言語でして、文法体系がきちんと整理された事が余り無

いのです。文法書があるにはあつたらしいのですが、
かつちり出来た文法というのがなかったようです。いや、
実はあつたんだという説もあるのですが、この辺は曖昧
ですけれど、たぶん論争になる事自体、余りはつきりし
た文法は浸透はしていなかったのではないかと思ひます。
文学や神学だとか、そういうものも含めた文学作品が比
較的少ない上に、規範的な文法が無いということは、そ
の言語が文化的に持つ力があまり強くなかつたという事
ではないかと思ひます。しかも、ある場合はギリシヤ語
のような外来言語に依存せざるを得なかつた。そういう
状況にアラビア語が入つてきたわけです。アラビア語も、
入つてきた時期にはまだ文法がそんなにきつりしている
わけでもないし、そんなにしつかり確立した言語だつた
とは言いきれないのですが、百年、二百年たつた段階で
は、アラビア語というのは非常にしつかりした言語に
なつています。その時に、様々なしゃべり言葉として習
うだけではなく、書き言葉でもそういうしつかりした言
葉を習つていこうと言う、そういう言語文化的な状況が
あつたのではないかと思ひます。

最後に、これは付け足しで、しかもこれにはかなり仮
説的な部分があるのですけれど、コプト社会、つまり、

エジプトのキリスト教徒達の社会は、アラビア語を受け
入れやすい社会的な特徴を持つていたのではないかとい
うことです。コプトは、自分達が政治的にマイノリティ
である事の存在意義を守るための、いわば防波堤として、
自分達の集団の中で最も優れた人達―つまり知識人―を、
意識的に、先程申し上げた行政職に送り込んでいます。
これには有名な例が幾つもありますし、行政官として成
功した例もたくさん挙げられます。そして、教育も、そ
の方向に自ら持つていくわけです。そして、先に言った
社会的な性格とこのことが結びついて、改宗者が出ても、
その改宗者と元のコミュニティーとの連絡はかなり緊密
にとられたようです。一族の中の、役人として偉くなつ
た人間だけが改宗しまして、残りの者は皆キリスト教徒
のままです。そして、彼が社会的に獲得した利
益は、かなりの程度、元のコミュニティーに還元するとい
う、非常に密接な関係を保つていたようで、勿論、これ
は、世代が何世代も経つていけば、それがだんだん薄く
なつていつて、遂には全体としてのイスラム化は進むわ
けですけれど、一世代、二世代という様な単位をとると、
いつも非常に緊密な関係を持つてるのが、コプト社会
の大きな特徴だという風に考えられます。そして、最終

的には、人口の上でもマイノリティになってしまったわけです。コプト教徒達がアラビア語化することは、様々な社会的・経済的なフアクターと並んで、マイノリティとしての、たぶん最大の自己保存法であったのではないかと考えられます。アラビア語化しなかったら、最終的には、政治的に反抗して自立するという選択しか残らなくなるわけです。たぶん、彼らは、かなり早い段階で、マイノリティとして生きようという選択をしたのではないかというのが、私の最後の、勝手な仮説なんですけれども……。そういう所で、一応、御報告を終わらせて戴きたいと思います。

三木 ありがとうございます。

エジプトみたいに、それ以前に何千年の文明を持った所の人々が、数世紀の間に、自分達の日常言語まで取り替えてしまったという、私自身も、昔から不思議で仕方なかったんですが、それは一体どういうことであろうかということ、いろいろな側面から考えていただきたかったです。

さつき申しました様に、続けて御三方に話していただいて、その後休んで後半に入りたいと思います。羽田さん、御願います。

羽田 私は、ヨーロッパといいますが、主に中欧から東ヨーロッパにかけてのユダヤ人問題とのからみで「イディッシュ語」についてお話しさせていただきます。ヨーロッパのユダヤ人問題を考える場合、一つは、いわゆる「ユダヤ人問題」という形でくくられる、ヨーロッパのユダヤ人に対する対処の仕方が、歴史的にどのような展開をとってきたのかという問題と、このイディッシュ語がどういう形で成立して、どのように、一種の「分化」をしていったのかという問題は、かなり密接につながっています。したがって、お手元のレジюмеでは、ユダヤ人問題とイディッシュ語を分けていますけれど、途中はかなり話がクロスしてくると思います。

先ず、イディッシュ語は何かという事ですが「板書」向かって一番右側の「ユードイッシュ」(Jüdisch)、これはドイツ語で「ユダヤの」「ユダヤ的な」という形容詞にあたります。この綴りの二番目の「ü」いわゆる変母音(ウムラウト)ですが「これが、東ヨーロッパに移住したユダヤ人の間で「平唇音化」した、つまり、「ユー」が「イー」という音に変化して、「イードイッシュ」(Jiddisch)になります。さらにこれが英語圏に移りまして、東ヨーロッパにいるユダヤ人の言語を「イ

「ドイツシュ」(Yiddish)と呼ぶようになりました。実は、これが最終的に、再びドイツ圏内に入ってきて、英語で書かれた「イディッシュ」をドイツ語に書き直しているんです。それが、所謂ドイツで研究される場合のイディッシュ語の表記になります。つまり、もともとは、「ユダヤ的な」「ユダヤ人の」というのが出発点にあって、それがドイツ語に再び戻ってくる過程で、音が変わり、表記も変わり、意味内容も「ある特定の地域のユダヤ人がしゃべるユダヤ人の言葉」と変化したわけです。これをレジユメの最初に書きましたのは、要するに、イディッシュ語研究のあり方を端的に表していると思うからです。つまり、もともとはドイツ系のユダヤ人がしゃべり始めて、その一部が東ヨーロッパに移動し、そこである独自の展開を遂げた言葉—これに対して誰が最初に関心を示したかと言うと、英語圏の研究者だった。それに対して、本来ならば最も近い所にいたはずのドイツ語圏の研究者達は、長い期間無視してきた。それが、戦後になってようやく、「ドイツ研究」(ゲルマニステイク)の一部として、イディステイクという学問領域が確立されてくる。これには、当然の事ながら、それ以前のドイツ、特にナチス時代のユダヤ人政策が色濃い影を投げか

けているわけです。もう一つ、これは、もう少し長い歴史の中で見ていきますと、ドイツ語とある面で余りにも近い言葉である為に、ドイツ人から見ると、独立した言語としては認め難いという意識が強くありまして、その為に研究が遅れたという事情もあります。ところで、イディッシュ語自体については、西イディッシュ語と、東イディッシュ語との二つに分けて考えるというのが、一応の定説になっています。ここで主に御話したいのは、東イディッシュ語と呼ばれる言葉です。これに対して、西イディッシュ語というのは、東イディッシュ語の母体になった言葉、正しくは「ユダヤ人ドイツ語」と訳すのが一番適切な言葉です。これも歴史的にいろいろ分類出されますが、ほぼ九世紀、十世紀辺りから、十三世紀半ばくらいまで、当時のラインラントからエルザス・ロートリンゲン、あるいはオランダの一部辺り、この辺で「原始イディッシュ語」が生まれたと言われています。つまり、その時期に今言いました地域に流入してきたユダヤ人達が、急速にその土地でしゃべられていた言葉、すなわち中世ドイツ語の諸方言を身につけていく。これをコミュニケーション言語として身につける事で、イディッシュ語の母体が形成された。これが、「西イディッシュ

「語」あるいは「ユダヤ人ドイツ語」という言い方でくられる言葉です。ただ、これは、むしろ「ユダヤ人ドイツ語」と言った方が良いと思います。と言うのは、これは当時の幾つかの文献や、あるいは、多少時代の下がった文献を見ましても、たとえば表紙の部分には「ユダヤ人によつて書かれたドイツ語による」といったタイトルがついたものがある。しかも著者の名前を見ると、明らかにヘブライ系の、あるいはユダヤ系の名前なわけです。ここから、本人達にせよ、あるいは、周りの非ユダヤ人社会つまり、ドイツ人を主としたキリスト教社会にせよ、ユダヤ人がしゃべっているドイツ語もドイツ語の一部だという見方をしていたという事は、ある程度確認出来ます。いずれにせよ、こうして、「ユダヤ人ドイツ語」が一方では形成されていきました。

ところで、所謂ユダヤ人のヨーロッパにおける歴史、これは、たとえば七〇年の対ローマ反乱、あるいは一三五年のバル・コホバの反乱の失敗といった形で、パレスチナー所謂、当時のユダヤ人から追放されていく事から始まります。これが一般に「離散」と呼ばれる現象で、厳密には「自然発生的な離散」である「ディアスポラ」よりは、「強制移住」を意味するヘブライ語の「ガルー

ト」と呼ぶべきものです。これで、当時のローマ各地にユダヤ人が「離散」して行く。そこから更に、たとえばピレネーを越えたり、アルプスを越えて今のドイツ圏に入ってくるユダヤ人が結構いた。これが、ヨーロッパに入ってくる最初のユダヤ人の流れだろうと言われていいます。その後は、地中海沿岸のアフリカを通ってイベリア半島に入ったり、あるいは小アジアへと逃れていった移民があり、更に、中世も中期に入ってきましたと、一つは第一次十字軍を頂点とするヨーロッパ内部でのかなり激しいユダヤ人迫害が起こります。これでドイツの地域にいたユダヤ人が、かなり東ヨーロッパの地域に移動してきます。十四世紀のペストの時代にも、迫害を逃れて、更に東の方へ移っていく。一四九二年から六年に、スペイン、ポルトガルから大量のユダヤ人が追放される。勿論、それ以前にも、たとえばイギリスですとかフランスなどは、十二、三世紀くらいからユダヤ人の国外追放という処置をとっておりですので、そういった連中が東ヨーロッパから当時のオスマン帝国辺りの地域に大量に移住していく。その過程で、「西イディッシュ語」が東側に持ち込まれたらしいというのが、大まかな言葉の移動経路になります。

ただ、不思議なのは、東ヨーロッパに移ったユダヤ人が、後に「東イディッシュ語」と呼ばれる様になる「ドイツ語をもとにした彼らの言葉」を捨てなかつたんですね。スラブ地域に入っても捨てようとしなかつた。その理由はいろいろ推論されていますが、「これが原因だ」といった決定的な結論は、まだイディッシュ語研究でも出ていません。ただ、地理的に言いますと、東ヨーロッパの中でも「東ユダヤ人」「東方ユダヤ人」と呼ばれる勢力が最も強かつたのがポーランドです。このポーランドに限って見ていくと、特に語彙のレベルですけれども、ポーランド語、あるいはスラブ系の言葉は、取り入れられています。しかし、基本的な文法構造であるとか、シNTAX等々、これは全く変わりません。勿論、微妙な変化はありますし、方言化して幾つか分かれてはいきませんが、根本的には変わらない。その一つの原因は、当時のポーランドと、彼らのもとの居住地域ドイツを比べた場合、ドイツの方が、文化的に程度が高かつた。従って、ユダヤ人が、文化的に多少低いと見做した地域の言葉に同化する必要は無いと判断したのだろうという推論が成り立ちます。もう一つが、これは、キリスト教社会全体の中での彼らのあり方と関連しますが、中世のある時期、

十三世紀の半ば以降ぐらいからは、かなりユダヤ人の職業が限定されてきます。もともと地中海交易などにもかなり積極的に関わっていたユダヤ人ですが、キリスト教ヨーロッパの中世の社会体制が出来ていくにつれて、その職業領域が、たとえば国内交易に限られていく。そこにもキリスト教徒が進出してくると、今度は金融業に入っていく。そういった形で、彼らに許される職業分野が限定されてきます。もちろん、ごく少数のユダヤ人が、絶えず上流階級と結びついて、オリエントなどとの交易は続けて行き、やがて宮廷の財政顧問的な役割を果たしていくという、細々たる流れがあります。それから、一般的には古物商といった小規模な活動まで含めて、通商と言ってしまうと、そういったレベルでの商業的なつながり、経済的なつながりが、彼らの元々の出身地であるドイツと非常に強かつた。従って、通商用語として、彼らが元来しゃべっていた言葉を保持する必要があつたのではないかといった議論もされています。ただ、何れにしても、はっきり、これが唯一の、あるいは決定的な要因だという事は言えません。いずれにしても、不思議な事に、彼らは言葉を捨てようとはしなかつた。その過程で、スラブ系の、先程言いましたポーランド語、ある

いはウクライナ語、白ロシア系の言葉といったものを、主に十四世紀以降あたりから、取り入れていきます。従って、十二、三世紀、つまり東ヨーロッパにユダヤ人が大量移住を始めてからは、イディッシュ語が、はつきりと「西イディッシュ語」つまり「ユダヤ人ドイツ語」と呼ばれるものと、「東イディッシュ語」と呼ばれるものに分かれていったと考えた方が適當だろうと言う気がします。

この内、西側のユダヤ人がそのまま保持していた「ユダヤ人ドイツ語」と呼ばれるものについては、十五、六世紀、特に宗教改革以降、キリスト教内部での宗派がはつきり区別されてくる。それに伴った処置だと言われているようですが、十六世紀辺りから、イタリアを中心にして、法的、あるいはシステムのにも、きつちりとした形でのゲットー化が進んでいきます。ゲットーという言葉自体の由来も、ヴェネツィアにある一今でも、かなり大きなユダヤ人地区が残っていますけれども地名なり建物の名前から来てるのではないかといった話もあるぐらいで、それが十六世紀あたりです。それ以降、ゲットー化が進んでいく。もっともそれ以前にも、ユダヤ人の居住地区は、それぞれの町で大体確定しています。これは、自然

発生的に生まれた同郷人地区だったと思うのですけれども、それから徐々に、ユダヤ人専住地域が生まれてきます。町によっては、遙かに以前に、ある程度の防衛機能を持った壁をめぐらしたユダヤ人地区も存在していました。ドイツの中でおそらく一番早い例だと思われるのが、一〇八五年頃に、シュパイヤーここは割合とユダヤ人に対して好意的な町だったんですけれどもここで、新しく拡張された市街の中にユダヤ人を招き入れようと、リューディガーという司教がユダヤ人の有力者に対して招聘状を出しています。その中に「壁を造って、外敵あるいは市民の襲撃から守れる様な地域を提供するから、是非来てくれ」といったような記録が残っております。ただ、一般的に言えば、十六世紀ぐらいからゲットーが各地に急速な形で広まっていった。

もう一つは、職業分野が限定されてくるという事から出てくる、ユダヤ人と非ユダヤ人間の社会的なコミュニケーションの問題があります。これも十三世紀辺りからかなり限定されたために、「ユダヤ人ドイツ語」もユダヤ人内部のコミュニケーション言語として限定されていく。その中で、この言葉はそれ自体で、それなりの発展をしていく。ただし、一つだけ補足すれば、早い段階で

は、あるいは十五〜六世紀の文章を見ましても、ユダヤ人自身が「ユダヤ人ドイツ語」を、あつさり「ドイツ語」呼んでいますし、周りの連中も「ユダヤ人のドイツ語」と言っています。とすれば、これは「ドイツ語」の中の一つの、あえて言えば「ユダヤ人方言」的なものとして考えてもいいのではないか。つまり、東ヨーロッパ程には、孤立した形で発展するという契機は、実は西側にはなかったのではないかと考えられます。と言うのも、十七、八世紀、特に啓蒙主義が登場すると、これに対応して、ドイツー特にベルリンーを中心に、ユダヤ啓蒙主義が台頭してきます。これは、モーゼス・メンデルスゾーンを中心として広まった運動ですが、この中で、彼は、「ユダヤ人のドイツ語」は近代国家、近代社会に生きるユダヤ人にはふさわしくない言葉だとして、「ドイツシユ語」あるいは「ユダヤ人ドイツ語」に対する強烈な批判を始めます。これがきっかけとなって、急速に「西イドイツシユ語」は消滅に向かいます。十八世紀末から十九世紀の始めには、少なくともドイツの大半の地域では使われなくなっていたと言われています。裏を返せば、それだけ楽にドイツ語化出来たのではないか。ドイツ語に移行する事が出来るだけの下地を、この言葉

が持っていたらとうと推測出来ると思います。

これに対して、東ヨーロッパ、特にロマノフ朝ロシアでは、徹底した反ユダヤ政策をとり続けており、しかも、ポーランドが、絶えず支配対象の地域として登場してくる。ある種の皮肉ですが、ロシア自体の方針は、ユダヤ人の国内定住を認めない。ところが、ポーランドのある地域を獲得することで、同時にその地のユダヤ人も抱え込むことになる。そこで、ユダヤ人を追放する。しかし、また領土が広がると、再びユダヤ人を取り込んでしまうということ、領土を広げる度に、ロシアは「ユダヤ人問題」にぶつかっていかざるを得ない。その一つの対応策として、「シユテトル」というユダヤ人専用居住村落みたいなものを各地につくりまして、そこに集中して居住させていく。そして、都市住民などの接触は極力これを避けるという方針をとります。おそらく、そういった事も背景となって、言葉のレベルでは、周りの地域の言語と融合していかなかったのではないかと考えられるわけです。

もう一つ、先程の「ユダヤ啓蒙主義」が、時代に対する西側ユダヤ人の一つの応答だとすれば、ユダヤ的な伝統を強く残した生活形態の取れた東ヨーロッパは、それ

だけ外界との接触が少ない世界、つまり、ユダヤ的伝統が色濃く残った世界でした。その結果、宗教的にも、ユダヤ教との結びつきは強く、その中から、「ハシデイスムス」すなわちユダヤ敬虔主義が十七世紀の後半に生まれてきた。背景としては、十七世紀半ばにコサツクによるユダヤ人大量虐殺が起こり、その精神的、物理的ダメージからいかに立ち直るかという要請がありました。今こそ神に対して敬虔な気持ちを抱けなければならぬ、しかも「祈りを捧げる」という非常に単純なレベルで、ユダヤ教あるいはユダヤの神につながっていく。つまり、難しい教義は一切捨てていくという形での、素朴でナイーブな宗教運動が生まれてくる。そう考えると、ユダヤ教自身の持っている宗教的な性格を、一言で言う、「負けない宗教」だという気がします。「負けない」というのは、ユダヤ教自身の考え方で言えば、世界全体の歴史についてのは神が主宰している。従って、すべて神の計画通りに進行していく。つまり、どんな試練でも、これは、契約を交わした民であるユダヤ人に対しての神の試練として解釈できる。その試練が強まれば強まるだけ――これは終末論と重なりますが――終末の時が近づいたという終末待望と結びつく。つまり、大きな迫害を受ける

と、むしろ、終末の発想と結びついて、宗教心が高まり、強まっていく。こうした考え方を基本的に置けば、ユダヤ教との結びつきが強く保持されている東ヨーロッパで、ユダヤ人が自分達の伝統に、悪く言えば「固執」して、良く言えば「忠実」に、周りの世界と一線を画して生きていった。それが、「イディッシュ語」を保持していったといったことと、結びつくのではないかと、全くの憶測ですが、そういう気も一面ではしています。

ところで、基本的に口語であるイディッシュ語は、ごく一部の例外を除けば、文語レベルでの目立った成果をあげてきませんでした。そのイディッシュ語が、文語として開花し頂点を迎えるのは、実は十九世紀です。十九世紀は、先程言いました様に、西ヨーロッパでは所謂「ユダヤ人ドイツ語」というのがほぼ消滅しかかっていた時期にあたります。この時期に、何でイディッシュ語が開花したのか。これも一種の歴史の皮肉ですが、「ハスカラー」つまりユダヤ啓蒙主義が、イディッシュ語攻撃をした。イディッシュ語から、それぞれの居住地、たとえばドイツならドイツ語に乗り換えよう。ところが、「ハスカラー」が東ヨーロッパに伝わった段階では、このことを伝達する手段としては、イディッシュ語しか

いんですね。つまり、ユダヤ人に対してイディッシュ語は悪い言葉だという事をイディッシュ語で伝えるしかない。しかも、ユダヤ人の場合、よく教育程度が高いと言われますが、これは専ら男子の教育について言えることです。成人式の儀式も含めて、ヘブライ語で聖書が読めなければならぬので、男子の教育は非常に早くから徹底して行われています。しかし、女子に関してはそういった教育は全く行われていない。とすれば、難しい言葉や宗教的な用語を使って、女性あるいは小さい子供達にイディッシュ語の害悪を説くわけにはいかない。つまり、それなりのレトリックが必要になってくるわけで、逆に文語としてイディッシュ語が発達してくるんですね。それが十九世紀の前半辺りから進行し、十九世紀の後半にはイディッシュ語文学が最盛期を迎えます。

ただし、イディッシュ語が最盛期を迎えていた時期に、西ヨーロッパのユダヤ人はその事を知っていたかという点、実際、殆ど知りません。その典型的な例は、政治的なシオニズムを創始したテオドール・ヘルツルで、彼は一八九六年に『ユダヤ人国家』というシオニズムにとつては、記念碑的なパンフレットを書いています。この段階で、彼は東ヨーロッパの事情についてはほとんど知ら

ないままに、悪く言えば机上の理屈として、ユダヤ人国家をヨーロッパ以外につくるしかないという「ユダヤ人問題」の解決法を探っていた。そういう意味でのユダヤ人の東西分裂があった。つまり、西イディッシュ語と東イディッシュ語が、それぞれ独自の歴史的展開を見せたのとパラレルに、東ユダヤ人、西ユダヤ人それぞれが刻んだ歴史もまた二本立てで、ヨーロッパの近代まで流れ込んできたのではないかい。そうした見方を裏付けるエピソードだという気がします。

それが、十九世紀になって始めて、東と西がぶつかってくる。かつて分かれたものが、今度は別の形でぶつかります。その一つが、十九世紀末、一八八一―二年に南ロシアで起こった「ポグロム」で、これから逃れてくる東ユダヤ人が大量に西側に入ってくる。もう一つは、二十世紀の第一次大戦。戦場となった東ヨーロッパを逃れて、東ユダヤ人が西側に入ってくる。そのとき何百年ぶりに西ユダヤ人は、独自の文化圏を持って生活していた東ユダヤ人に出会ってショックを受ける。何がショックかと言いますと、西ユダヤ人とは、別の言い方をすれば「同化ユダヤ人」です。つまり「同化」とは、十八世紀以来西欧が用意した近代国家理念、ごく簡単に言えば、

一民族一国家という理念に適應して、ユダヤ人、ユダヤ教徒である事を捨て去り、ヨーロッパ社会の一員となることに他なりません。ユダヤ教徒・ユダヤ人である事を「個人化」する事によつて、別の社会の枠組みの中に入り込もうとする。これは、ある種ヨーロッパ近代とユダヤ啓蒙主義とが一致協力して行つていった方向だと思ひますが、その過程で、ユダヤ人的な要素をなるべく早く自分の身の回りから捨て去ろうとしていたユダヤ人の前に、突然、亡霊の様に、捨て去つたはずの「ユダヤ人」が東側から登場してくる。これで、西側は一種の混乱状態に陥ります。たとえばウィーン辺りに入つてくる連中に対する対応について、「ある部分までは受け入れは出来るけれども、それ以上受け入れると、われわれ西側のユダヤ人の地位が脅かされる」として、たとえばロスチャイルドあたりが、ウィーンのユダヤ共同体に流入制限を打診してもいます。そういう形でのユダヤ人社会内部での対立関係、あるいは溝というものが、十九世紀から二十世紀にかけて顕在化してくる。顕在化した事によつて、ある面ではシオニズムが成立するきっかけが生まれたのだらうとも思ひます。つまり、一方には反ユダヤ主義の台頭がある。これは、十九世紀末、ユダヤ人の

法的平等が認められ、社会に参入し始めてから急速に広まっていく政治運動ですが、ユダヤ人からすれば「同化」したと思つた瞬間に、これがあらためて「ユダヤ人」である事の意味を対決的に問い直してくる。と同時に、内部からは、忘れていたはずの「ユダヤ性」といったものを東ユダヤ人からつきつけられる。そうした中で、ユダヤ人は、何らかの形で新たなアイデンティティの模索と言いますか、自己同定をせざるを得なくなつていた。その一つの方策としてシオニズムが生まれてくる。従つて、西側ユダヤ人のヘルツルがその時期に『ユダヤ人国家』を著した事と、東ユダヤ人社会の内部では「シオニズムの先駆者達」と呼ばれる人達が様々な活動を通して、具体的なパレスチナ移住を計画したり、シオニストの団体を組織していくという事が平行して起こつていた、しかも、それぞれが、相手について十分に知らないまま活動していたと言う事を考えると、むしろヨーロッパ自体が抱えるユダヤ人がらみの問題が、十九世紀の末になつて集中的に現れてきたととらえるべきだと思ひます。おそらく、その背景の一つは、十八世紀末以降の近代化の中で良くも悪くも「ユダヤ人をどう扱うか」という問題にヨーロッパが直面したことにあります。これがゲッ

トーから解放されたユダヤ人を目の前にしてつきつけられたヨーロッパの課題だったわけですし、それに対して答を出そうとした結果、非常に短い期間の間に、その困難さをあらためて思い知らされていく。つまり、ある面では、ヨーロッパ自体が、シオニズムあるいはイスラエルという形で、ヨーロッパ外に解決策を求めざるを得なかった。そのようにしてしか解決しようがなかったヨーロッパ近代化の側面こそが「ユダヤ人問題」だったと言う気がします。その意味でも、「イディッシュ語」が語る歴史的な展開、これはかなり強引な結論の付け方かもしれないかもしれませんけれども、おそらく十九世紀のヨーロッパの歴史の、ある面で言えばネガの部分を表しているのではないかと言う様な気がします。

まとまらない話して恐縮ですが、以上で終わらせていただきます。

三木 ありがとうございます。

イディッシュ語の問題は、今の羽田さんのお話して判りの様に、ヨーロッパにおけるユダヤ人の歴史全体とつながっているんで、大変な問題で、無数の問題点があるわけですが、ここで、三時四十五分までお休みしまして、それであと五時まで、コメントやら、質疑応答、討

論をお願いしたいと思います。

休憩

三木 それでは、再開致したいと思います。暑くて、湿度でいて、湿度百二十パーセントっていう感じで、皆さん河岸のマグロみたいに（笑）なっちゃっているわけですが、勇気を奮い起こして（笑）大いに質問やら意見やらお出しください。

はじめに、私が、少しだけコメントめいた事を申し上げます。「ことばの歴史生態学」と称して、今まで手がつけられていない領域へ殴り込みをかけようと、これを始めたわけですが、今の御三方のお話を伺って、皆さんも感じられたと思うのですが、まるでパンドラの箱を開けたみたい、問題がいっぱい出てきて……三人の方がお話しになった事を、小器用にまとめるなんてことはどうも出来ません。それで、ちよつと違った観点からのコメントを申し上げます。

一つは文化人類学の方の考え方で、世界中のあらゆる人々が何らかの文化を持っているが、それら文化の相互に価値の上下は無いということです。どの文化が上等で、どの文化が下等であるなどという事は一切ない。これは

イギリスの社会人類学あたりからはじまって、文化人類学では建前となつてゐる考え方です。ただし、それはあくまで建前であつて、欧米の人類学者の実際は必ずしもそうはなつていないと思ひますが……。そうして、その文化は実際には言葉を媒介として営まれていきますから、言葉に関して、どの言葉が上等で、どの言葉が下等だといふ価値の上下は無い。これはやはり、言葉を歴史の中で扱つてゆく場合に出発点となるべき考え方だと思ひます。それで、ある文化が消えると、それに関連する言葉が消えます。ある言葉があれば、それに対応する文化があります。人類学的にいつて、文化と言葉というものは、その意味で対応関係を持っています。ここ数十年の日本のいわゆる高度成長で、日本各地にあつた様々の文化が破壊され、あるいは消滅して、それと同時に、言葉も非常に貧しくなりました。ただ、都市に関して、新しい文化が生まれ新しい言葉や表現が出てきたことは、それはそれなりにあると思ひますが。いずれにしても、そういう言葉と文化との対応関係、それと、いずれの場合にも価値の上下はない。それをまず出発点にしたいと思ひます。

つぎに、言葉というものは、人々の、ひろい意味での

暮らしの必要を土台として存在するものである。それが、第二点です。歴史的な条件あるいは地域的な条件はいろいろ変化します。それに対して言葉の諸相があるわけですが、それはやはり、それぞれの地域、それぞれの時期における、そこでの人々の必要が、言葉のあり方・文化のあり方をも規定してゆく。わかりきつた話ですが、そのことは、やはり基本に据えるべき事だと思ひます。

それから今一つ。最近、中公新書に、ストラスブールにお住まいの日本人で、東部トルコで十七年間、言葉のフィールドワークなされた、非常に面白い本があるんですが（小島剛一『トルコのもう一つの顔』中公新書）、それなどを見ますと、ある意味では、今イラクに関連して問題になつてゐるクルド人・クルド語などというものはないんじゃないかと思つたりもします。すくなくとも、外からクルド人と呼ばれてゐる人々多数にとつては、そんなものはないんじゃないか。それぞれのごく小さい範圍の生得の言葉でかれらは暮らしてゐるだけの話であつて、クルド語だとかクルド人というのは、外から欧米人の貼つたレッテルではないかという性格の問題があると思ひます。そういうレッテル貼りをする人びとは、この小地域ごとの人びとの生得の言葉を方言と呼びます。

御三方いずれの場合にも、基本的に民衆のレベルまでふまえて—文字を持たない人が近代以前では非常に多いわけですから、民衆のレベルをふまえるということは当然、口語の世界をもふまえて—言葉の問題を考えてゆくというところが出発点となっているわけです。そういったレベルの言語状況とでもいうべきものが、小島さんの書かれたものの中に、非常によく出ています。

しかも、あれは現代の話なんです、いわんやほんの百年も時代を遡ると、世界じゅうどこでも同様で、日本語などというものも、明治以降、義務教育と兵役という近代国家の暴力によって、ある意味では創り出されたものじゃないか。小島さんが書いておるとおり、何々語などというものは、いったいどれだけの地域範囲を切りとって囲い込むのかという問題があるわけです。それは一面では、言葉を研究したりする人が、ある意味では勝手にやる事であって、だから極端な事を言えば、東京山の手語があり、東京下町語がある、それらは独立の言語であると言ってもべつにかまわないわけです。この文脈で言えば、アフリカの部族ごとの言語がそれぞれ独立言語とされている反面、北京語と四川語と広東語その他の中国の地域語が全部あわせて単一の中国語とされたりも

しています。他方、どの範囲の地域で言語を切りとるかということが、いわば歴史的な偶然によって左右されるのが、多くの場合だともいえます。だからたとえば、日本語といった場合に、沖縄の人々の言葉は日本語であるのか、ないのか。歴史的な言語意識の面で、沖縄の人々には、そういう問題があります。このような問題は当然、言語と歴史社会の問題を考えてゆく場合に、考えるべき事であろう思います。

ところで、そういう観点に立った場合に、実際には、人々は口語で日常的に暮らしている。何か必要がある場合に、人々全部ではなくて一部の人が文字言語の表現を使う。文字言語の表現を使う人も、日常の暮らしは口語で暮らしている。その場合、私が前にいた東大A A 研の、亡くなった言語学者の石垣さんに聞いた事ですが、ある土地の人々の、日常的に使っている単語だとか言いまわしは、大抵の場合せいぜい数百であるそうです。これは、おそらく我々自身もそうじゃないかと思えますけれども。言語が消え去ったり、ある人々が言語をとりかえてしまったり、あるいは、現代へブライ語みたいに、ある言語が新しくつくられたりする。そういう事を考えてゆく場合に、このような実際の人々の言語生活の実態

というものを、あたまに置いて考えてゆく必要があると思います。

それから、ユダヤ人問題、イディッシュ語あるいはヘブライ語の問題なんかに関しても言える事ですが：ある言葉が日常の暮らしのレベルで維持されていく、そのために必要な局所的なコミュニケーションのサイズ（これには価値観も関係すると思うのですが）という問題があつて、局所的なコミュニケーションが小さすぎると、大抵の場合、その言語は消えて、周りの言語に人々は同化されていきます。これは、在日韓国・朝鮮人、在日中国人の方々なんかの：今、二世・三世・四世の方々で、韓国・朝鮮語はもう全然知らない、あるいは中国語は全然知らないという方も沢山いる。にもかかわらず、自分たちは韓国人、朝鮮人である、あるいは中国人であるという自覚的なアイデンティティ意識は、お持ちである。具体的な人々の暮らしと言語、それから、ある意味でのアイデンティティ意識、そういういった関係を考えていく場合に、この局所的なコミュニケーションのサイズみたいなものが問題になるんじゃないでしょうか。

次に、今までの話しの中である意味では自明の事としていますが、たいていの場合、バイリンガル、マル

チリンガル、二つ以上の言葉を実際に使っているというのが世界的には普通であつて、たった一つの言語だけで暮らしているという方がむしろ例外じゃないか。実は私自身、こうやってNHK共通語で今話しておりますが（笑）、ところがうまれ故郷の関西弁で話しますと、表現出来るものが—それから、極端に言いますと、自分のからだの感覚も—全然違います。この点で、私自身、自分は東京に移住したときからバイリンガルだと思っております。それがさらに、間違いだらけのへたくそでも、どこかへ出て行って英語で暮らしたり、あるいはアラビア語、トルコ語で暮らしたりすると、それはまた、体の感覚も意味世界も変わってきます。

また、中東の人々などと沢山つきあつてきて思うのですが、さつき申しました暮らしの必要から言語がある。その暮らしの必要には、いろいろな面がありまして、たとえば、アラブの人々で、こういう学会みたいな所でアラブの人同士が話す。その時は、いわば放送アラビア語とでも申しますか、文語を簡略化して、面倒な子音なんかも易しい方に代えてしまつて、そしてオーラルで話せる中間（ワシート）アラビア語、そのエジプトなまり、シリアなまり、モロッコなまりなどで話しあう。違った

アラブ地域の商人なんかが商売する場合も、そのようです。しかし、その人たちは、日常的な自分の暮らしは、カイロ弁で、あるいはモロッコのラバート弁で、あるいはトゥーニス弁で、ダマスカス弁で、暮らしているわけで。それぞれの生活の場によって、いくつかの言語を使いわけると。そういつた事が、むしろ当たり前であると言う事を考える必要があると思います。

それから、口語と文語、文字言語と非文字言語の関係も、これもやはり、どちらが上等で、どちらが下等だという事は言えないと思います。それぞれに利害得失があつて、湯川さんのコプト語のお話しのように、あるいは岩見さんのパハラヴィ語のお話しのように、文字言語の文字表現があまり出来ない場合に、言語としての持続性が相対的に弱い。そういった、文字化する事によつて、ある意味での普遍性、文明としての移動性なんかを持つ。口語の世界には、その両方は欠けている。ただ、司馬遼太郎さんがどこかで「アメリカという国は、文明しかない国だ」と言っているのは、私は大変印象的なよい言葉だと思つているんですが、アメリカ語という一これも世界的に言えばローカルな言葉でしかないわけですが一これは文明語の側面では、貿易摩擦の問題など

でよく見られるように、非常に理路整然として展開されます。ただその場合には、およそ生活のにおいが無い。それは結局、サブコミュニティ、エスニック集団などと呼ばれる、WASPから始まるエスニック集団のそれぞれの方に、つまり、それに対応するヒスパニックだとか、イタリア系、中国系、日系だとかワスプ・イングリッシュだとかにあるわけです。そういった、文字言語と文字化されない口語表現、その両者の関係も、現在見ますと、地域によつて大変違います。今の日本語は、圧倒的に文字言語が優勢になつてしまつて、口語に関連する文化領域が非常に狭まつた。その意味では、非常に貧しくなつた言語状況があると思うんです。アラブの世界など参りますと、文字を持つていてる人でも、口語表現・口語の世界が、ものすごく広大にあつて、かれらは日本にくらべるとはるかにゆたかな人間社会を持つていてる。関連して、記憶力がものすごいのですが、これは、アラブ社会の多重ネットワークと関連する事だと思うのですが、そういった事が認められると思います。

最後に、全体として、三人のお話しになつた事を異文化接触の問題として考えてゆくと、つまり文化に対応する言語の接触の問題として考えてゆくと、さらにいろん

な問題点を取り出せるし、また、ある意味の展開もあり得るんじゃないかなと思うっております。

今まで申し上げました事は、お互いあまり関連もないし、パネラーがお話しになったことも直接にはつながらない事も沢山あるのですが、やはり、歴史の中の言語を考えるとこの事を始めた以上、そういう言語というある意味でのものの存在形態について論じる以上、こうしたことは考えておくべきじゃないかと思えます。以上が私のコメントです。

後は全く御自由に、質問・意見、いろいろいただきたいと思えます。はい、どうぞ。

足立 本日、午前中の西洋史部会で発表致しました足立と申します。古代末期のビザンツというか、東地中海のいろいろな、そういう…キリスト教の社会ですけれども、聖人の問題とか、社会の問題を扱っています。特に今日、一番関連致しますのは、コプトの社会でありますけれども、それだけではなくて、やはり同時代的な、ビザンツのライバルであったペルシアなんかも関心がありました。今日のシンポジウムは非常に楽しみに来ていたんです。私自身、最初の二つの発表はですね、アラビア語という事が重なっていて、本当に不思議で仕方がない。それ

で、メッカからメディナにーヒジュラと言うんですかーマホメットが移ったという、あれが六二二年で、そして、ビザンツとペルシアとの戦いから見たら、ほとんどどっちほけな部族戦でしかない様なレベルの戦いをやってメッカに帰ったのが六三〇年ですね。そして、マホメットが死ぬのが六三二年。ところが、シリアに攻め込んで来たのが六三六年、わずか四年後ですね。エジプトに入ってきたのが六四一年。ペルシアを征服したのも六四一年、カーデイシアの戦いと、それから、ここ（レジュメ）に書いてあるナハーヴァントの戦い。僅か、マホメットがメッカに帰って、数年ですよ。そして、それが、それから後の今日に至るまで千三百年の言語生活を規定してしまう。これは、今回もお話しを伺ったんですけれども、まだなお、釈然としないんです。この時代を扱う者として、残るんですね。

まず第一に人口差が全然違う。ペルシア人とアラビア人。それから、ビザンツ人とアラビア人と。全然違うんです。これが何故、アラビア語化していくのかというのが…。たとえば、御二方の話でも「文字体系が大した事がない」と言いますか…この言い方自体が、先程の「言葉に上下はない」という言い方からすると、私ちよつと

引っかかるんです。「その書字体系が大した事ないから、
どうこう」と言うのが。これは、厳しい言葉ですけど、
「後知恵」ではないのか。それでちゃんと表現出来てい
る時もあるわけです。やっぱ、アラブの征服という
事が七〜九世紀にあつて、全て「アラビア語化」して
いつて、そして、後から考えて付けた理屈じゃないのか
なという風に思うわけです。何が一体これだけの決定的
な要因になつてくるのかと言うのが、なお、よく判らな
いんですね。たとえば、コプト語に関しましても「文法
が欠如している、文学作品が欠如している」(と言つて
いる)所があるんですけれど、これは、たとえば、シリ
ア語なんかはどうなのか。これは、アラム語表現で、古
代末期に非常に華麗な文学を生み出しているんですね。
私が扱っている初期ビザンツの「聖人伝」なんかにして
も、ギリシャ語の前に、先ずシリア語で非常に流麗なも
のが書かれているわけですね。で、よくアラビア人が
「ヨーロッパ人ではなくて、アラブこそが、アリストテ
レスとか、そういうギリシャ哲学を受け継いだ」って言
いますけれども、あれも、最近のビザンツ学の成果では、
直接ギリシャからアラブではなくて、シリア語とかコプ
ト語を介して伝えられたという風に言うんですね。そう

すると、そうした、それだけのものが、たとえばペルシ
アの場合であれば後で復興する要因もあつたのに、何故、
コプトとシリアに関しては、全然、完全に、アイデン
ティティまでアラブ人になつてしまうのか。この辺りも、
発表を聞かせていただいても、ちよつとよく判らないで
す。全く発表を聞かないみたいなお話しになつてしま
うのですけれど：何か、更に判る様な事つていうのは無い
でしょうか。全く不躰な事になつてしまふんですけれど、
この御二方の中から…。

三木 はい。大きく申しまして、何故、アラビア語が、
ああ言う大言語になつて、今に至るまで続いているかと
ていう…：これに関しましては、岩見さんと湯川さんと、
それぞれ、お考えを話していただきたいと思ひます。そ
れから、シリア語、アラム語という、広い意味のシリア
との比較の問題。これに関しては、湯川さん、お答えい
ただきたいんですが。先ずは、湯川さんから。

湯川 後の方の質問に関してですが、実は私にもよく
判っていません。ともかく、先ず最初、人口を考えてみ
ますと、アラブの征服軍なんて、人口比で言えば非常に
少なかったと思ひます。その後も、アラブ人ーアラビア
半島から出てきた、所謂「生粋のアラブ人」ーが、そん

なに沢山いたわけではない。にもかかわらず、十九世紀以降になるとアラブ民族主義がおこり、エジプト人も「自分達はアラブだ」と、シリア人も「自分らはアラブだ」、みんな「アラブだ」と言うわけですね。ただ、アラビア語という事を離れて、アラブの民族意識—民族としてのアラブ—という事を考えてみますと、エジプト人が自分達をアラブだと呼ぶのは、私は、古い史料ではほとんど見た事がない様な気がします。では、エジプト人は、自分達の事をなんて呼んでいたのかというと、これもほとんど何も言わないですね。エジプトの事を「ミスル」と言います。それで「ミスリー」、なまって「マスリー」と言うのですが、「マスリー」という言葉は、たまには出てきます。でも、本当にごくわずかの例です。ともかく、「自分らは何とか民族」という事はあまり言いません。アラブ人も、一般にあまり言わなかったのではないのでしょうか。ただ、「アラブ」と「アジャム」とか、そういう区別はあります。つまり、「アラブ」と「非アラブ」という様な意味なんでしょうか。それから、「アラブ」と「ペルシア」という様な意味も含んでいるのでしようけれど。そういう漠然とした区別はありますけれど、そんなにはつきり言っているわけじゃない

んですね。その上、アラビア語のできるアジャム（非アラブ）はたくさんいるわけで、「アラビア語」をしゃべっている人達—あるいは使っている人達—が「アラブ」だという意識では無いと思います。では、民族意識とは全く別個の、純粹に言語だけの問題かというところ、ここがまた難しく、おっしゃる通り、確かに「後知恵」なんです。後から考えると「既存の言語にはいろいろな欠点があつて、だから、アラビア語を使った方がやり易いから、多分アラビア語を使ったんだろう」と言える部分はたくさんあります。とはいえ、その当時は、たとえばコプトにしてみれば、教会内部でギリシャ語も結構使っていますね。それから、コプト語も残っている。それなりに、やってきたわけですね。ずーっとやってきたのだから、それに「お前ら勝手にやってる」と言われているのだから、その儘でいいわけなんです。にも関わらず、アラビア語化していく。これは、やはり、社会的な要因が一番強いと思うのです。ただ、その社会的な要因も、よくよく考えると、今一つよく判らないところがあります。つまり、支配者の数—支配層ですね。支配層としてアラビア語をしゃべる人の数—が、急激に何かの理由で拡大していけばいいのですが、実際には、エ

ジプト人がアラビア語を獲得して、その中に少しづつ加わる事によってしか大きくなっていかないのです。だから、社会的な力が作用したから、アラビア語―特に、支配を通じてのアラビア語―が浸透したから、エジプト人がアラビア語をしゃべるようになったのだというのは、ぐるぐる回りになってしまふわけです。アラビア語をしゃべる人が増えたから、余計影響が大きくなって、影響が大きくなってきたから、アラビア語をしゃべる人もっと増えたと、ぐるぐる回るロジックでしか説明出来ないわけですね。決定的な説明にはなり難いんですが、それでも、なおかつ、社会的な要因が大きいだろうと：その中でも、私は、やはり、特に大きかったのは、支配層の持つ力が表される場所としての「都市」の拡大が、非常に大きな要因だったんではないかと思えます。これは、ある言語からある言語に移る時の、決定的な要因に常になつていくかどうかは、私にはよく判りません。つまり、他の地域で、本当にそういう事が起こったかどうかは判りませんが、少なくとも、エジプトに關して言えば、この点では「イスラム化」と「アラビア語化」というのは、ある程度平行しているのですが、「都市化」が、その中ですごく大きな意味を持っていると思

うのですね。大体、八世紀の末から九世紀の半ば頃までに、コプトの大反乱が幾つか起こります。これは税金に對する反乱なんですけれど、それが叩き潰された後に、急速にイスラムに改宗する人達が出てくるんです。これは、理由はよく判らないと言われているのですが、ともかく、イスラムに改宗する人達が出てきて、それと同時に、農民が農村を離れて「都市」に集中します。都市に集中しだした結果、都市人口が増えて、そして、中央の影響力を離れて、たとえば、トゥールーン朝というエジプト独自の―政治的にはアッバース朝の宗主権を認めながら、エジプトの富・経済力を基盤にした―王朝が出来てきます。その後、イフシード朝というのがあります。それから、その後、ファーティマ朝という、これも移動してきたんですけれど、基盤はエジプトの経済力による王朝があります。エジプトの経済力は、勿論、一番底には農村の農業生産力があつたのでしようが―実際に、王朝の収入は農業生産が主な部分を占めているのですけれど―いわば繁栄を支える部分は「都市」の経済的繁栄なんです。 「都市」が非常に繁栄する。それが、「イスラム化」していく過程の中で、重要な要因として作用しているし、アラビア語が急速に普及していった大きな

原因にもなっていないのではないかというふうにも考えられます。でも、これも非常に間接的な説明でしかないわけですね。言語そのものについて説明出来ているかどうか：ちよつと飛躍があると思うのですが。まあ、「社会的な」という場合は、特に「都市」の問題を、私は考えたいというふうに思っているんですけど。

三木 別の言い方で簡単に言ってしまうえば、コメントで申しました「いろんな言語の間に、価値の上下はない」と言うのは、研究者の態度として申し上げたんで、それぞれの地域・時代でいろんな言語を使っている人々相互の間に、「あつちが上等だ」「こつちが下等だ」って言う様な、そういうった価値観はいつも必ずあります。それで、今の湯川さんのおしゃった中で、アラブの支配層と関連して創り出された文明・文化が、そうじゃない言語を使う人々にとつて非常に魅力的で、それで、言語のレベルでも引き寄せられて行ったんじゃないかという、その側面があると思うのですが。

岩見さん、さっきの「アラビア語が何故ああいう大言語になって、その後も持続していったか」についてのお考え、何かありましたら、どうぞ。

岩見 あまり思い浮かばないんですけども：一つは、

やっぱり、アラビア語が宗教の言語だったという事。おそらく、イスラムを受け入れるという事を考えたら、アラビア語もくつついてくる。勿論、それでは、ことに今の世の中を見て、じゃあ「ムスリム」なら誰でもアラビア語を知っているかと言うと、けしてそうではありませんので。しかし、宗教の言語としての面があるという事ですね。

もう一つは、イランに即して申しますと、コプトの場合と違ひまして、イラン人が日常会話の言語としてアラビア語を用いた事は、僕は無かつたと思います。だから、先程の湯川さんの分類で言うと、行政の言語として、初期においては、行政の言語としてのアラビア語が、普及したんだろうと。勿論、それと相まって、ペルシア語自身の不備さというもの―これは確かに「後知恵」かもしれませんが―ペルシア語自身の不備というものがあつて、行政の言語としてのアラビア語が普及した。それが、だんだん、行政の言語としても、少なくともイランではアラビア語を用いる必要がなくなつてきて、ペルシア語にその地位を奪われる様になると、アラビア語が結局、学問―ことに宗教関係―の学問の言語として残る事になつたと。その宗教というものは、やっぱり―なに

しろ、『コーラン』はアラビア語で啓示されているものだから—当然アラビア語中心になっていくだろう：という様な事ぐらいしか、ちょっと思いつかないんですが…。

三木 ありがとうございます。

質問を出された方にとって、必ずしも満足のゆく答ではなかったかもしれませんが…。はい、どうぞ。

新井 社会学研究科修士課程二年の新井高子と申します。岩見先生に主に質問なんですけれども、私はこの発表を聞いておりました、ペルシアとエジプトで、共に大きな文明を持った所でありながらも、エジプトの方はコプト語を捨ててアラビア語に収斂されていった。それに対して、ペルシア語の方はアラビア語と並存する様になった。湯川先生から、エジプトがアラビア語化された理由について、政治的・社会的・地理的・コプト語自身の特徴という様な面からコメントをいただきました。それに対応する形で、何故ペルシア語とアラビア語は並存するのか、その点について御聞きしたいと思います。

三木 岩見さん、どうぞ。

岩見 非常に簡単に申し上げまして、イラン人にはアラビア語は難しかったから。

(会場、笑)

湯川 その点に関してなんですけれども—たとえばシリアの場合、シリア語・アラム語というのが、今でもシリアのごく一部の村で使われている。それから、教会内でも幾分か生きていますけれども、それでも、キリスト教会でもアラビア語は普通語ですね。岩見さんがおっしゃった様に、ペルシア語とアラビア語は言語としてすごく違いますが、シリア語・アラム語とアラビア語は、単語を入れ換えていけば殆どそのまま通じる様な言語です。その点、コプト語は、もうちょっと離れています。だけど、私は、コプト語の方からコプト語の問題を考えたのではなくて、コプトからイスラムになったり、コプトのまままでいたけれどもアラビア語を使う様になった人達の方から見ているので、コプト語そのものをよく知らないのですけれども、それでも、たとえばペルシア語とアラビア語よりはずっと近い関係にあると言えるようです。これは、先程から申し上げているように、様々な要因もあるし、今からではなかなか判らない理由もあって、そういうのが重なりあって、誰かが採用し始める。特に、社会的に影響力のある様な人達が採用し始めると、社会全体がその言語に移るのは思ったより早いような気がし

ます。その辺の言語の社会心理学みたいのはよく判りませんけれども、何か、すつと移ってしまったのではないかという気がします。それで、先程の話しにちよつと戻りますと、たとえばヘレニズムの遺産はシリア語で継承されていて、それがアラビア語に翻訳されます。翻訳したのはシリア語を使う人達です。あるいは、自由にそれを使った人達です。そういう人達がアラビア語を一端採用すると、周りの人達も、それにつられてパツと素早く移ってしまったのではないかという気がします。その過程は、勿論、何かに記録として残されているわけではないので、はっきり判りませんけれど。その点、やはりペルシア語を話す人たちは、本当に知識人達がアラビア語学習を一生懸命やるわけです。一生懸命やるけれども、すぐ大変なんです。大変だと思つてからこそ、一流の知識人が、ものすごく一生懸命やるわけです。その点で、受取る方が言葉を比較的楽に使いこなせる場合と、そうでないのとの差は、大きかった気がします。

三木 今の事に関連しまして一九八三年でしたか、トルコを二度目に歩き回つた時に、トルコの知識人・町の人を問わず何人もの人から、トルコ語は難しいというのを聞いて驚いた事があるんです。私にとっては、トルコ

語はアラビア語よりはるかにやさしいんで、シリアでアラビア語で暮らしていて、それからトルコへ行つて、トルコ語は、私はほんの片言ですがトルコ語の世界へ入つてトルコ語で暮らすと、何か肩の力が抜けて大変気楽なんです。これはただ、日本語と言葉の並べ方の順番が同じで、音に関しても、日本人にとってわりあい発音しやすい、そのせいだろうと思うのですが。そういう、トルコ語とアラビア語とペルシア語というのは、言語としての性格がずいぶん違つている面があります。それに對して、アラビア語とアラム語、シリア語、あるいは、もうちよつと遠いけれどコプト語、ベルベル語なんかは、相対的に言語としての性格が近い。その関連は当然あるだろうと思います。

ほかに問題は： はい、どうぞ。

長谷部 東洋史研究室の長谷部です。湯川先生に伺いたいと思つていたんですが、コプト語の消滅つていうのは、確かに非常に難しい問題で、いつもどうしてかなという風に思つているわけですけれども：エジプトの「口語」といいますかー先生のお言葉ですと「日常言語」ですねーそういうレベルで考えてみた場合に、アラビア語が「コプト語化」したつていう側面も見られるんじゃない

かと思うのですね。つまり、たとえば、イントネーションの問題であるとか、語彙の問題であるとか。それは、三木先生のおっしゃった異文化接触の問題と関わってくると思うのですけれど、ちよつと違ったポイントから見ると、「口語アラビア語」の「コプト語化」っていう側面も考える必要があるんじゃないかと言う風に、一つ思います。

もう一つは、エジプトにおけるその他の言語グループとして、ヌビア語の問題があると思うのですね。それは、主に上エジプトのアスワン辺りを中心にして、今でもバリンガルの人達がかかり居るわけですね。ある時期までは、コプト語とヌビア語っていうのが、ある意味で「接触」している様な形で存在していた事も考えられるわけで、そういう意味で、コプト語だけが「アラビア語化」して、ヌビア語の方は残ったというのは、一体どういう様な意味があるのかっていう様な事とか、ちよつと伺いたいと思うのですけれど。

湯川 最初の問題ですけれど、「アラビア語化」すると言っても、百パーセント「アラブのアラビア語」を話したり書いたりする様になったのではなくて、自分達の手持っていたものがそれにかぶさっている、あるいは、そ

の中に潜り込むということは、当然考えられる事です。初期の、九世紀、十世紀ぐらいに書かれたコプトの手紙というのが、ほんの少しですけれども残っています。これは「中世アラビア語」というのに似ています。つまり、文法が「古典アラビア語」の文法ではないのです。明らかに、「話し言葉」がかなりよく出来る人がそれをそのまま書いたように見えます。現代のエジプト方言にかなり近いところがあります。古典文法通りではなくて、動詞の変化なんか簡略化されてしまう様な側面とか。さらに、長谷部さんのおっしゃる通り、コプト語の「音」が強い影響を与えたであろうことは、当然推測できます。だから、エジプト方言は、アラビア語の方言の中でもーマグリブのを除けばーかなり特殊な方言になっていますね。ただ、当時のアラブ人のしゃべっていたアラビア語がどのようなものが判らないわけですね。「文語」をその通り、彼らはしゃべっていたわけじゃないので。それも所謂「中世アラビア語」に影響を与えているわけですから。一般論としては「エジプトの口語アラビア語はコプト語の影響を受けている」とはつきり言えると思うんですけども、厳密に「では、どの部分」というのを限定していくのは非常に難しい。つまり、

テープレコーダーの無い時代ですから、人々がどういう言葉をしゃべったのかっていうのは、本当に断片的な形でしか出てこないわけですね。書かれたものに、ほんのちよつと名残があるくらいです。残っている例の手紙を一度御覧になっていただくと判るのですけれど、かなり崩れたアラビア語で書いています。その崩れ方っていうのが「コプト語」の影響かどうか判りませんが、ともかく「正則アラビア語」から離れたのを書いてる。これが、コプトの人達の書くアラビア語の一つの特徴になっていると多くの研究者が言っています、幾つか確認された事項だと思えます。

それから、ヌビアとコプトの関係なんですけれど。ヌビアは、地理的に言いましたも、アスワンより向こう側で、カタラクトで段差がありますので、船は乗り換えなければいけないわけです。地理的にもかなり遠いし、平野部分が急に狭くなります。そういう事で、征服自体も随分遅れますし、イスラム化はものすごく遅れて、キリスト教がずつと残っている地域です。だから、ある意味では、ヌビアは、エジプトの中で「エジプトと呼んではいけないけれども」残りの部分に比べれば、孤立性を保ったと思います。現に、未だに保っている部分

があると思うのです。スーダン側に入って行きますと、幾つかまだ教会が残っていたりします。そういう意味で孤立性がある所で、そこで彼ら自身の言語を守る様々な要因がある。政治的にも宗教的にも、完全には飲み込まれないで、生き残れる要因があつたんじゃないかと思えます。それで、ちょうど境の辺りの人達は、やっぱり両方に接するわけですから、ある種のバイリンガルになつていく、というのが、歴史の流れではないかという風に考えています。

三木 今の湯川さんのヌビアとの関連のお話で思い出したんですが、シリアで、ダマスカスのごく近所に、マアルーラという、アラム語で今も暮らしている村がありますが、これは行ってみますと、非常に孤立した、要害の地の奥の、孤立した場所なんです。昔、プラノールさんというフランスの研究者が、中東の宗教地理学みたいな新書版くらいの本を書いていて、その中でレバノン山脈、アンチ・レバノン山脈の地域は、地理的条件から孤立した、あるいは孤立し得る様な場所が多くて、そこで、宗教的マイノリティなどが存続しうる条件があるということを書いていました。これは、言語についても、ある程度言えるんじゃないかと思えます。

それから、さっきの長谷部さんの発言で思い出したんですが―これは、都市の話ですが、ダマスカスとカイロと、たとえば、モロッコのラバートをとってみると―口語レベルです―これが、同じアラビア語かと思うほど、イントネーションや、それと関連したゼスチャーなどが、ぜんぜん違います。反面、文語レベルでは、イラク、アラビア半島から、モロッコ、モーリタニアに至るまで、統一されています。

ほかに、また。はい、どうぞ。

坂本 文学部の坂本です。今日のテーマは「ことばの歴史生態学」っていう事なんです。お聞きしていて―言葉の、異なった二つの言語の「接触」、それから言葉の「転換」を、「文語」の方からやる場合と「口語」のレベルでやる場合と、両方のアプローチの仕方があると思いますけれども―今日のお話は、どちらかと言うと、特に中東・イスラム世界では比較的早い時期なので、どうしても「文語」の方のレベルでやっていかざるを得ないのかなと、その辺りが大変に難しいなと、感じとしては持ちました。

で、質問なんです。二つあります。一つは湯川さんに対して、あと、もう一つは羽田さんに対してです。

シンポジウム「ことばの歴史生態学」

最初の、湯川さんの方の質問はですね―先程、私、文語と口語からの二つのアプローチがあるんじゃないかと、それは当然だと思えますが、文語の方に限ってみても、なかなか言葉の転換の問題を、後付けていくのは難しい。これは事実だと思えます。ただ、湯川さんのお話の中で出てきた「典礼用語」の問題。これはやはり、文語のレベルで言葉の転換を考える場合には、非常に大事な尺度になっていくんじゃないかと思えます。それで、聞いてて大変に面白いなと思ったのは、単性論派のコプト教会の人達が、ある時期に、自分達の典礼用語をコプト語からアラビア語へと換えていく、こういう事実があったという事を指摘されました。それは、その通りだろうと思うのですが、エジプトのキリスト教徒達の問題を考える場合に、今日採り上げられた、単性論派のコプト教会の人達を取り上げるのはごく自然のやり方だと思いますが、あと一つ忘れてならないのは、アレキサンドリアに総司教座を持つ、所謂カルケドン派の一つの教会組織だと思えるですね。彼らも、元々はコプト語をしゃべっていた人達だと思えるのですが―私は、余りはつきりよく判りませんけれども―典礼用語としてはギリシャ語を使っていたと思うのです。そう言う、ギリシャ語を典礼用

語として使っていた、コプト教会と対比される、アレキサンドリア総司教座の、たとえば、典礼用語の「アラビア語化」運動みたいなものが起きたのかどうかという事が、湯川さんに質問したい点です。

続いて、羽田さんの方に移らせていただきますが、羽田さんの今日のお話はヨーロッパにおける、二つのユダヤ人のグループの問題を話されたと思うのです。私は、やはりイスラムの事を勉強している者ですから、ヨーロッパのみならず、ヨーロッパと接触するイスラム世界の諸地域に住むユダヤ人の問題も、併せて考えたいと思っています。それで、ヨーロッパに居たユダヤ人と、イスラム世界に住んでいたユダヤ人の接触の問題について、質問させていただきます。これは、ヨーロッパに住んでいるユダヤ人の場合にはアシケナージ、イスラム世界に住んでいるユダヤ人の場合にはセファルディムと、こう言われているわけですね。言葉のレベルで言うと、ヨーロッパに住んでいるユダヤ人の場合にはイディッシュ語をしゃべっていた、あるいは使っていた。それに対して、イスラム世界の場合には「ラディーノ」という言葉を使っていたと、こういう風に言われるわけですね。この二つの世界にまたがるユダヤ人達の接触が本格的に

出てきたのは、十九世紀以降だと思うのです。で、最後のところで、羽田さんは、確かその事をお話しになっていたと思うのです。その具体的な過程を、どういう風に促えていったら良いのかなっていうのが、私の疑問、聞きたいところなんです。その研究手続きですね、それを羽田さんがどういう風にお考えになっているのかっていう事をお聞きしたいんです。私自身の考えを述べさせていただきますと、この二つの世界にまたがるユダヤ人達が接触する地域――昨日から、内戦に突入したとか、あるいは、そこまでいっていないんだとか言われる――ユーゴスラビアなどは、非常に良い接触の場であったと思うのです。よりもう少し具体的に言いますと、ユーゴスラビアにボスニアっていう所がありますが、あの地域は元々はオスマン朝に支配されていた、イスラム世界の一地域であったわけですね。そこには、セファルディムと呼ばれる様なユダヤ教徒達が、沢山住んでいた。ところが、一八七七年に露土戦争が起きて、その結果としてのベルリン条約が結ばれた。その後、ボスニア地方がオーストリアの軍事占領の下におかれた。そして、一九〇八年になって、本格的なオーストリア・ハンガリー帝国の併合下に置かれる。そこで、その結果として、オー

ストリア・ハンガリー帝国に住んでいたアシケナージ系のユダヤ人が、かなり沢山ボスニア地方に入ってきて、従来ボスニアに住んでいたセファルディムとの間で「接触」を起こすと思うのですね。その過程というのは「私は大変好きな小説の一つですが、ユーゴスラビアのノーベル賞作家のイボリアンドリッチが『ドリナの橋』で書いている。そこに登場する、ロッテっていう名前の、確かボスニアのある町で、酒場を経営している女性を通じて、アシケナージ系のユダヤ人の移住の問題を書いていると思うのです。で、だいぶ長くなってしまったのですけれども……二つの世界にまたがるユダヤ人相互の接触、それをどういう手続きを経ながら明らかにしていく事が出来るだろうか。たとえば、エリアス・カネッティみたいな人が居るわけですね。今は「現代ドイツ文学界の大御所だ」って言われているわけですが、元々の彼の出身は、ブルガリアのルスチェクっていう所です。セファルディム系の人で、若くして最初は、確かイギリスのユダヤ人社会の中心でもあったマンチェスターに行くわけですが、その後でウィーンに行って活動して、そこでアシケナージ文化を摂取する。そこから辺りの、セファルディムとアシケナージとの相互関係なんていう

のはどうだったろうかっていう事が、ドイツ文学の専門家である羽田さんから、是非お聞きしたいところです。

三木 はい。それでは、まず、湯川さん。

湯川 マリキットなんですけれども、マリキットの一番盛んだったのは、やはりビザンツ時代ですね。アラブのアレキサンドリア占領と共に、かなりの程度の人口が――聖職者を含めて――逃げたと言われています。かなり小さなコミュニティになってしまっただけですね。歴史的にずっと生き残ってはいませんが。勿論、典礼言語はギリシャ語です。コプトも、かなりの程度ギリシャ語を使っていたんですけれども、マリキットは百パーセント、ギリシャ語で、ものの本によると、一時はほとんどいなくなってしまうと言われるぐらい数が減ったそうです。ですから、しばらくの間は、時々は大司教は誰だとか出てくるんですけれども、十九世紀になる位まで記録はそんなにないようです。たぶん、彼ら自身の教会の内部に入れば、そういう史料は残っていると思うのですけれど、今は殆ど手を付けられていない状況です。カイロにも今は教会が出来ていまして、そこでそういう教会文書を研究する様な小さなグループが出来てきたという話しは聞いた事がありますけれども、彼ら自身、そういう教会の

歴史および信徒達のエジプト社会における歴史っていうのは、今のところあまり判っていないっていうのが、現状じゃないかと思えます。

三木 羽田さん、お願いします。

羽田 どの程度、御質問に御答え出来るか判らないですけども：所謂「ヨーロッパ系」と「イスラム系」という事で大きく分けて考えるのと、あと、たとえば、先程御指摘があつたボスニア辺り。これは先ず、所謂「ヨーロッパ系」と言いますか、イスラム世界からの、あるいは、イスラム世界にいるユダヤ人が、どういう形でヨーロッパと接触していくのか。これは一つには、イベリア半島の問題を抜いて考えられないと思うのです。所謂「レコンキスタ」の前後で、あの時期、「アラブ系」と言いますか、「イスラム系」のユダヤ人がイベリア半島に入っていた。その中のかかりの数がキリスト教化した世界の中で残っていく。それが十五世紀の末に、先ず、スペインとポルトガルから追放されていく。しかも、彼らは西ヨーロッパを飛び越えざるを得ない状況にあつた。つまり、フランスとイギリスがそれ以前からユダヤ人追放をしていたために、一部がオランダの方に入って行きます。あと一部がドイツの中に分散化して行きながら、

更にドイツを越えて東ヨーロッパからオスマン帝国の諸地域に渡って行く。「セファルディム」と「アシケナージ」の接触は、おそらく、その辺からきているだろうと思えます。ただ、それ以降、そこで「接触」し、どういう風に、相互交流と言うか、コミュニケーションが成立していたかについては、未だ充分調べていませんので、何とも御答え出来ませんが、ただ、ユーゴのボスニアにしてもそうですし、あるいは、もう少し幅を広げて、「ハプスブルグ帝国」の中におけるユダヤ人の問題—そこには、やがて「ドイツ帝国」を形成するドイツ地域とは微妙に違う問題がどうしても出てきます。これは、おっしゃる通りだと思えます。今言つた様な形での、ユダヤ人内部の一種の「東西接触」が一つ。もう一つ、ユーゴとは少し違いますが、たとえば、ボヘミア辺りですと、ドイツ人、あるいはオーストリア系ドイツ人とチェコ人と、中間層的な存在としてのユダヤ人といった異民族間のコミュニケーションが、どう図られていくかと言つた問題も含めて考えざるを得ません。ただ、非常に大ざっぱに「東ヨーロッパ」と言えば、先程のエリアスIIカネッティもそうですし、もう少し前に遡れば、ジークムントIIフロイトやフランツIIカフカあるいはハ

ルツルもそうなんです。それから、最近日本で流行っているマラーヤ、少し時代は下がりますが、最後はパリで自殺してしまった詩人のパウル・ツェラーン。それぞれ出身地は違いますが、彼らにはそうした共通点があります。これはおそらく世代の問題とも微妙に関わってくるのですが、十八世紀末にフランスあるいはオランダ辺りから始まった「ユダヤ人解放」の波が、オーストリアにも十九世紀の半ばには到達してくる。その中で、(一八) 四八年、実効力がある形では多分(一八) 六〇年代に入ってから、実質的な「法律上の平等」あるいは「解放」が実現していく。これが、今挙げた連中の一世代もしくは二世代前、つまり祖父の世代に、ほぼ当たっています。この世代が、先程言った「政治的理由での移民」とは違う一種の「社会的な流入」と言うか、あるいは「経済的な移住」と言うか、とにかく一斉に「大都市」に向かつて移住を始めます。これが、ある研究者の言葉を借りれば「ひたすら前進する事だけを唯一のモチーフにし得た第一世代」です。この時期になると、オーストリア内のユダヤ系の社会は、かなりの程度まで「同化ユダヤ人」のグループに入れて考えても構わない動きを見せている。その典型的な例は、正にウィーンですけれど

も、あそこに東側から、様々な理由、様々な目的で流入してくる。勿論、あの当時は社会構造、産業構造の転換期で、ハプスブルグ家自身が、十九世紀の半ば辺りから、遅ればせながら工業化に向かつていました。そのための労働力としても、大都市がある程度の収容力を、それまでとは違った形で提供出来る様になってきた。それに見合う形で、移動の自由を与えられたユダヤ人コミュニティの動きが始まっていく。たとえば、フランツ・カフカの父親が典型的ですが、チエコの寒村で生まれ、そこからプラハを目指して進んでいく。最終的には、おそらくウィーン辺りを目指していたのかもしれませんが。これはマラーヤの父親なんかもそうですね。イーグラウ辺りから始まって、徐々に徐々に最終目的地、あの当時で言えばウィーンに向かつていく。ヘルツルの場合もブタペストからウィーンへ。あるいは、ツェラーンですと、チエルノビッツ、ブコビナーこれはルーマニアです。辺りから、ブタペスト経由等でウィーンに向かつてくる。それが大体、祖父から、せいぜい父親の世代にかけての典型的な動きになっています。逆に言えば、それ以前のユダヤ人コミュニティがその過程で解体していく。解体する事を良しとする世代があったと思うのです。そのモ

チーフが、実は二世代、三世代目になって崩れてきてしまふ。これが、おそらく十九世紀の後半、七〇八〇年代から、二十世紀の初めにかけての時期で、ドイツ文学レベル、あるいはオーストリア文学の範疇で言いますと、ユダヤ系の知識人なり文化人がもつとも活躍する時期なんです。それを考えますと、ある種、捨て去る事をよしとしていた世代から、捨て去る事によって失ったものと獲得したものとの帳尻を合わせようとして、実はマイナスが大きすぎたことに気付き始めたのが丁度、その辺の世代にあたります。もちろん、それ以前の出自をどちらにとるかには非常に難しいのですが、ある種の共通項として、オーストリア辺りに関しては、「法的解放」と「同化」が単純なレベルではぼイコールで結び付けられた。その「同化」世代の二世代目あたりから、一種のアイデンティティ・クライシスに落ち込んでいく。それが、文化的な面で、たとえば父親やそれに先行する世代に対する一種の埋め難い距離感みたいなものを生み出した。これは、表面的に見れば「ドイツ表現主義」辺りのテーマになってしましますが、実はそれだけではないという気がします。むしろ、フロイトの言う「エディプス・コンプレックス」などは、ある種、非常にユダヤ的な見方で

はないか。たとえば、モーセに関して「モーセは一人じゃなく、二人、もしくはそれ以上いたかもしれない」といったフロイトの見方と実はだぶってくる。そうした問題も、所謂「文学史」の裏側に実は隠れている。それが見え隠れし始めるのが、正に十九世紀の末のウィーンやプラハあるいは多少限定をつければブタペストだったのだろうと思います。ですから、手続きという点で言えば、東ヨーロッパの地域全体の中で、十九世紀の前半から後半にかけて、ユダヤ人がどういう形で移動していくのか、空間的のみならず文化的な位相の面での移動も含めて、その辺を少し慎重に見ていくと、おそらく、今言われた様な点が、もう少しはつきり見えてくるだろうと考えています。それ以上の事は、申しわけありませんが今のところお答え出来ません。

三木 どうもありがとうございます。もう時間が無いので、違った種類の質問を： はい、どうぞ。

平山 もう、時間もございませんので：。私、平山と申しまして、西洋史の出身でございます。本日は、知らない地域について、いろいろ：最近の中東戦争でクロージアップされたいろいろな問題を、伺いまして大変に有益であったと思います。

羽田先生にちよつと御伺いしたいのですが：実は「イ
ディッシュ」という言葉も、今日はじめて、教えていた
だいたわけですけども、現在も、西と東のユダヤ人は、
ヒトラーの大虐殺がありました後でも、やはり残ってお
るんでございましょうか。その一点をちよつと御伺い
いたします。

三木 はい、羽田さんどうぞ。

羽田 イディッシュ語人口については、戦前は割合細か
い史料が残っています。一九三五年の統計では、全世界
では、バイリンガル等を含めて千七十万ぐらいが「イ
ディッシュ語」をしゃべっています。この内、七百万弱
が東ヨーロッパに集中していた。それが、今お話しのお
りましたナチスのユダヤ人政策の結果―実は、あの時期
にどれくらい殺されたのかという事の数字自体も、七百
万ぐらいから三百万ぐらいまで、あるいはもつと少な
いっていう説もありまして、確定していませんが―戦後
に関しては激減して、今現在、全世界で四百万から三百
万人ぐらいの「イディッシュ語」人口があると言われて
います。ただし、ドイツや東ヨーロッパでは、ユダヤ人
人口は、百万のオーダーから十萬のオーダーぐらいまで
激減しています。一方、旧ソ連の場合は、たとえばビロビ

ジャンではユダヤ人自治的なものが発足して、今現在
はかなり減っていますが、未だにイディッシュ語をしゃ
べる。イディッシュ語の新聞も定期的に出ている。この
発行部数は確か一万数千部だと言う話しを聞いた事があ
ります。それ以外では、アメリカ、特にニューヨークで
すね。東ヨーロッパからのユダヤ人の移民の最大の目的
地の一つがアメリカだった事もあつて、ニューヨークを
中心にしてまだある程度の数のイディッシュ語人口は
残っている。あともう一つは、イスラエルになります。

ここも確か三十万か四十万ぐらいのイディッシュ語人口
があるはずですよ。ただ、イスラエルの国語は「現代ヘブ
ライ語」です。「国語」として何を選ぶのかという議論
は、実はかなり早くから行われており、その際、「イ
ディッシュ語」も候補に挙がっていたらしいんですね。
ただし、それに対しての反発も強かった。というのも、
イディッシュ語がある種の「ヨーロッパの歴史の影」み
たいなものを余りにも強く引きずり過ぎている。だから、
抵抗もかなり強かったという事です。細かいことをすつ
かり忘れてしまったので、単なるエピソードでしかない
のですが、ある知り合いのユダヤ人から聞いた記憶があ
ります。つまり、一九三〇年代の半ばぐらいにある映画

が作られて、それが大論争を巻き起こした。その映画を、「ユダヤ教徒」「ユダヤ人」に見せようとしたらしいのですが、台詞を何語にするかが問題になった。「現代ヘブライ語」は、この時期から既に準備が始められていたらしいのですが、それをを使うか、「イディッシュ語」を使うか。結局、両者全く譲らない形で、最終的には「無声」で流した、無声映画にしてみましたということなのです。ですから、逆に言えば、その分だけ、まだイスラエルも、イディッシュ語人口の多い地域とは言えると思います。ただ、激減している事だけは事実で、一部では、このままいずれ死に絶えてしまうのではないかと言われています。

三木 はい。あと、おひとりだけ、いままでに無い問題点ありましたら… はい、米津先生。

米津 時間が余りありませんから、簡単に申し上げます。で、簡単に御答えいただいて結構ですけれども。羽田さんに御願いしたいのですけれど… 「近代ナシヨナリズム」との関連で「シオニズム」ってものが出てくるっていう事ですね。それが、ウィーンヘルツル、あの辺から出てくるという事ですけども、その様な「ナシヨナリズム」というか「ネイション」というものの根底に、

宗教と言語が、大体として基本にあると—これも常識的な事ですね。そうしますと、この「シオニズム運動」に對する—今、羽田さんが、坂本さんの質問等に対して挙げられました—大体、十九世紀の前半から後半、まあ二十世紀にちよつとかかつてもいいのですけれど、東欧のユダヤ人の、特にインテリ達—マーラーだとかフロイトとか、いろいろ挙げられましたけれども—そういう人達の「シオニズム」に對する関わり方とか、関連とか、そういう点について簡単に教えていただければ有り難いと思います。

羽田 手短かにお答えしたいと思います。先程名前を挙げた様な人々を中心にして言えば、こうした知識人階級の多くは、「シオニズム」に對してはかなり批判的です。ヘルツルの活動自体、実質的には、主に「対ロシア」という観点から、ユダヤ民族運動を組織していた東ヨーロッパの若い層と結びついていく事で、徐々に「シオニズム」として政治運動化していくわけです。それに対して、西ヨーロッパやドイツのユダヤ人の、しかも「同化意識」のぐらつき始めていた連中にしても、実は「反ユダヤ主義」の政治運動を一過性のものと考えることが、結構多かったですね。また、「シオニズム」にしても

「反ユダヤ主義」のカウンターとして捉えられる傾向も割合強かった。と言う事は、「シオニズム」自体もおそらく一過性のものと見なされていた。そのために、「反ユダヤ主義」が深刻化していく事に対して十分アンテナを張りきれなかった部分が、間違いなくあったと思います。ドイツのユダヤ人が、何故ヒトラーの時代に深く入るまで何も出来なかったのかという事を、よく戦後世代が批判したらしいのですが、実際、「同化政策」を進めていく事が生き残る唯一最善の道だという楽観的、希望的な意識を、かなりの西側ユダヤ人が持っていたと言う風に言っていると思います。

三木 あともうおひとりだけ： はい、どうぞ。

松田 東洋史の修士課程の松田と申します。「文字」と「言語生活」の事について、聞きたいのですけれども：岩見さんと湯川さんと、二つの例を比べてみますと、岩見さんの方の、ペルシア語のパフラヴィー語というものの文字の不完全さというのが、一つ問題になっています。あと、湯川さんの方ですと、コプト語というのが段々「アラビア語化」していく時に、先ず行政命令というものが全てアラビア語となって、知識層―所謂「文字」を使う様な人間―が、アラビア語化していくところ

から議論が出ているわけですが、実際に、「文字」というものは「言語生活」とは―切り離すという事は出来ないかもしれないけれども―ちよつと次元の違うところではないかと思ひまして：と言うのは、たとえば、実際にその「言語」を使って生活している者も「文字」を読めるか読めないかというレベルの問題が、先ず一つあるという事。それから―僕は、中国史を勉強しているわけですから―たとえば、江戸時代の日本の漢学者とこののが、朝鮮からやってきた漢学者と、漢文でもって「筆談」をするなんていう状況があるわけです。それぞれの「生活言語」としては、日本語があり朝鮮語があるわけで、その当時の中国語というのはもつと口語の中国語があるわけですから、そう言った全く「生活言語」を異にしている者が、「文字」というものを通じて意志の疎通を図ると言う事も出来るわけですし、そういった意味で、「文字」というものが、果たして「言語」と言うもの、ここでは、特にコプト語が、ある意味で滅亡して「アラビア語化」していくという様なプロセスにおいて、「文字」の持っている役割というものをどう御考えかという事を質問したいと思います。

三木 はい。

湯川 コプト語の場合を考えますと、一番最初の征服期は、何しろ征服者であるアラブというのは行政能力はあまり無かったのです。基本的に軍隊だったので、地元の人々の役人達に課税徴税を任せただけです。前通りにやって、とにかく金渡せと言う方式で任せました。ビザンツ時代は、行政はギリシャ語がかなり浸透していた。

勿論コプト語も使っていた。「文字」はそれぞれ違います。ギリシャ語はギリシャ文字で、コプト語はコプト文字です。それを暫くやっていて、それから、ギリシャ語とアラビア語が並列的に使われる時期も一時ありました。役人は「文字」だけでなく、勿論それを読んで口頭で人々に伝えることが出来なくては行政が出来ないわけですから、そういう行政官になった人達は、ある時期はバイリンガル、場合によっては三重言語ぐらいにはなつたと思います。他の人達は、そういう形で入っていったのではなくて、「文字」を読める人は本当に数少ないわけですから、特にアラビア文字なんて、変な文字ですからね、読みにくいわけです。「文字」で入っていったわけではなくて、一部の人達が話し言葉としてのアラビア語をしゃべる様になった。そして後に、「文字」を勉強する人達が出てきて、読み書きも出来る人達が出てくる。

そういう過程を経て、段々増えていったんではないかと思えます。

三木 それでは、いくらでも問題は出てくると思うのですが、もう予定時間を十分ほど過ぎておりますので、本日のシンポジウムはこれで終わりたいと思います。どうも、暑い中を、ありがとうございました。

(拍手)